

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成十九年三月二十三日發行

國語國字

第百八十七號

目次

第七十八回講演會

實踐「いろは歌」一千首	中山典之	1
外交と日本語	岡崎久彦	14

挨拶

會長就任の挨拶	小田村四郎	28
---------	-------	----

特別寄稿

言葉の雜學（七）	鹽原經央	29
----------	------	----

會員寄稿

縦書きの文法的原理	若井勳夫	33
聖書に於る國語問題（その五）	松岡隆範	37
上代特殊假名遣臆見	市川浩	40
萬葉集における自動詞と他動詞	齋藤恭一	44
「我つくさなむ」について	上田博和	46
數字の書き方	高崎一郎	48
近代日本の「ねじれ」解消の可能性	前田嘉則	53
契沖と悉曇（その一）	谷田貝常夫	58
空想的實務主義を排す	木村貴	62
八行の活用について	松岡隆範	65

和歌

契沖研究會短歌大會寄稿歌

書評

『常に諸子の先頭に在り』留守晴夫著	土屋道雄	70
-------------------	------	----

編輯後記

題字

谷田貝常夫
近藤祐康

實踐「いろは歌」一千首

中山 典之

(司會) 會員の中に、わ行の「ぬ」と「糸」が書けない、解らないといふ人が殖えてゐることに危機感を持つてゐる人がゐます。私も折あるごとに人に「ぬ」と「糸」が読めるか、書けるかと訊いてゐます。すると、なんと國の官廳の局長までやつた人もわからなかつた。習つてはゐる筈なんです、それほど縁のない字になつてしまつた。これはやはり五十音圖の復活をきちんとやらなくてはいけない、その爲には「いろは歌」がよからう、「いろは歌」の實踐と云へば、この中山先生が今や日本の第一人者なので、御話をお願いした次第です。中山先生は日本棋院の棋士で六段、海外に二千人ばかりの御弟子さんを御持ちであると同つてをります。日本棋院の中では、異色の活躍をしてをられます。

御紹介にあづかりました中山典之と申します。碁をやつてをられる方なら大抵の方が私をご存知でせうが、かうい

ふ學問的な世界で話するのは初めてです。よろしくお願ひ申しあげます。ここに所謂「いろは歌」を並べましたが、三年ほど前、宇野精一先生の御講演を承つたことがあります。その時に仰つてをられたのですが、イギリスのブリタニカ百科事典は大變權威のある百科事典ださうです。その中にアルファベットといふ項目がある。それによりますと、世界に百の國があれば百の言語がある。民族が百あれば百のアルファベットがある。しかし、そのアルファベットが美しい歌で綴られてゐるのは日本だけである。かう書いてあるさうです。宇野先生が仰つたのですから間違ひない。してみると、いろは歌といふのは世界に冠たる日本の財産なのです。それを聞いた時、そのイギリス人の如何にも羨ましさうな顔が想像されるわけです。例へばABCDEFGHIJG……は歌になつてゐません。意味をなしてゐませんか。「ABCD、EFG」といふ歌は有るには有りますが、單なるメロディーでね。日本の方は、ここにありますやうに、

色は匂へど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ

有爲の奥山けふ越えて 浅き夢みじ酔ひもせず

立派な歌です。七五調です。七字五字、七字五字とあり

ますが、當時の日本語は「ん」といふ音が無かつたのですね。従つて、「わがよたれぞ」だけ七五調がちよつと缺けてゐるんです。これは六つしかありません。しかし昔のいろは歌の作者は誠に巧妙なもので、これでよろしいんです。色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ——やゝ間があつて、常ならむ。ここが破調になつてゐるのが、少しも苦にならんわけです。面白いですね。

この歌は一般の人々は弘法大師作と錯覺してゐるんですが、事實、さう傳へられて來ました。しかし、この歌が現れたのは平安時代中期であり、今から千年ぐらゐ前なんですね。奈良時代の弘法大師には全く關係が無いんですね。詠み人知らずの名歌なのです。爾來千年、この歌は日本語のアルファベットのな役割を果して傳へられて來た譯です。今は全く廢れてゐます。何故かと云ふと、このわ行の有爲の奥山の「ぬ」ですね。これと、酔よひもせずの「ゑ」が死刑にされてしまつた。誰が死刑にしたのか知りませんが、この宇野先生の講演を聞いたときには進駐軍のマーカット教育局長とか云ひまして、「ぬ」は、あいうえおの「い」と同じである、「ゑ」は「けふ越えて」の「え」と同じだから必要がないと。しかし亂暴な話があるものですね。千年も續いて來た日本の言葉をね。だから、もし將來アメリカ

と戦争が起きて日本が勝つたら、英語のXやQは要らない、廢止せよ、とかうやる（笑）。そんな事云へませんよね。例へばQなんて、ほんとに少ないですよ。queenとかques-

tionとかquiteとか。重要な單語だといふ印がついてゐるのは四つか五つ。Xに至つては本當に無いんです。そんな亂暴を容認したわけですから、非常に不可解千萬な譯です。それにしても千年來傳はつて來たこの歌が消えるといふのは誠に不思議なこととして、これも三年前に宇野先生の御講演を聞いた時に、宇野先生は東京大學の文學部の學生を前に白い紙を配りまして、「諸君、いろは歌を書いて下さい」と申された。宇野先生は、その子たちの學力がどれくらゐか知りたかつたのです。答案をまとめて點檢したところ、略々完全に書けた人が三分の一、白紙答案が三分の一、後の三分の一は怪しげなことを書いてきた。私は愕然としましたね。六十五年前には——私ただ今七十三歳ですが、小學校一年生の三學期になれば、いろは歌などは全員が知つてゐたものなのです。これを以て今の日本の教育を論じると、現今の東大生の學力が昔の小學校一年生の學力に若かず——ある意味ではさう云つて差支へないと思ひます。不思議な事があるものです。例へばイギリスの中學生は四百年昔のシェークスピアを讀めますね。日本の大學生は七十

年前の夏目漱石が讀めない。これだつて實に憂慮すべきことなんですね。

とにかく、いろは歌といふのは國民的名歌で、私がいろは歌に氣づいたのは恐らく三歳か二歳か一歳か、母親の背中で聞きました。子守歌代りです。それに氣が附いたのは、ずつと後の小學校四年生の頃、唱歌の時間に、昭憲皇太后の御歌を習ひました。明治大帝の御后でいらつしやいます。こんなメロデーです。私は聲が悪くて申し譯ありませんが歌つてみます。

金剛石も磨かずば珠の光は添はざらむ

人も學びてのちにこそまことの徳はあらはるれ（拍手）

私はこの歌を習つた時、そのメロディーを、どこかで聞いたことがあるなあと思つて家に歸つて母親に尋ねたんです。今日、かういふ歌を習つただけど、どこかで聞いたやうな氣がする、お母さんに教はつたのかな、と云ひますと「あゝそれは越あてらんく天樂だよ。大昔から宮中に傳はつてきた笙しやうひちりき、箏じゆなどの樂器で伴奏される雅樂の越天樂でせうよ。」私は、はつと氣が附きました。二歳か三歳の時に聞いた、いろは歌。そのメロデーは昭憲皇太后御歌のメロデーとそっくりだつたんですね。

色は匂へど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ

有爲の奥山けふ越えて……（唄）

實に千年くらゐ昔から傳へられて來た日本の歌なんですね。大和民族のバックボーンと云つてもいいやうな歌なんですね。それを戦後の馬鹿役人がGHQの威を借りて廢止したんですね。いろは歌は一つの藝術作品であり文化遺産ですから、この歌を小學校の一年生か二年生の教科書に何としても押込むことですね（拍手）。何故かと云ひますと、イギリス人が「アルファベットが歌で出來てるのは日本語だけだ」と云つてくれてゐるんだから、この一點を強引に押しましてね。さうすれば、この歌には「わ行」の「ぬ」と「糸」がありますから。子供なんてのは早いものです。理屈抜きに自動的に「ぬ」と「糸」を覺えます。これは私が先づ第一に申し上げたいことです。

さて、このいろは歌ですが、私は、實は、このいろは歌に類する歌を千ばかり作りました。千も出來る譯はない、と思ふ方は、そこに私の著書がありますから見て下さい。小さい變化まで入れれば二千や三千ではききませんよ。思へば、日本の歌といふのはみな七五調なんですね。俳句でも和歌（短歌）でも長歌でも旋頭歌でも、すべて七五調になつてゐます。それと千年前に現れた今様といふスタイルですな。後白河法皇が編集された『梁塵秘抄』といふ當時

の流行歌を集めた歌集がある。何で「今様」かと云ふと、「今様」に對する語は「古風」でせうね。昔から傳へられてゐる和歌です。それに對して今様です。短歌とか長歌とかの和歌といふのは五七、五七、五七と、ずっと續いて來て、最後を七で締めるわけですね。短歌の場合は五七五七と來て、最後に七で締める。一番短い俳句の場合は五七五で最後の七を省略しますね。この今様ですが、七五、七五、七五、七五と、七五調を四回繰返すスタイルなのですな。ここで思ふことは現在でもちよつとした歌は全部七五調四行の今様體なのですな。例へば、春高樓の花の宴、春のうららの隅田川、待てど暮せど來ぬ人を、月は朧に東山

…氣の利いた名歌はみんな千古不變の七五調の今様です。酒は飲め飲め飲むならば、もさうですね。都都逸や謠曲、長唄の類まで七五調ですね。私の母親は小學校しか出てない明治の人間ですが、私をおんぶして山の蔭で草むしりをしながら謠曲の練習をしてゐるのですな。

風早の 三保の浦輪を 漕ぐ舟の 舟人騒ぐ 波路かな
五七調や七五調ですね。思へば私は生れながらにして七五調の中で育つた。これは大事な事なんですな。

さて、いろは歌を作りませう。先づ作つてみなけりや。
ふ、る、い、け、や、か、は、づ、と、び、こ、む……

いちいち指を折つてこんなことをやつてゐるやうでは全く見込みがない（笑）。喋るのが自然と七五調にならなきや御話にならない。いろは歌なんてものはなかなか出来るものぢやない。これを作つた人は、平安時代から明治になるまでに、私の知る限りでは二人だけですな。

八百五十年間に天下の文人墨客が詠んだいろは歌的な歌は三十首ほどありますが、見るべき歌は二首だけですな。

一つは國語學者の本居宣長先生で、同じ文字なき四十七文字の歌と言ふ立派な歌があります。もう一つは谷川士清たにかはとすかといふ、この方も國語學者です。なぜ八百五十年の間に二人しか、二首しか出来なかつたのか不思議に思つて考へたことがあります。私、思ひますに、いろは歌を作れたであらうと思ふ方が少なくとも三人はゐます。一人は松尾芭蕉、もう一人は井原西鶴、そして大田蜀山人です。この三人なら出来ない筈はありません。必ずや試みたと思ひます。宇野先生も若い頃試してみたと承りましたが、この三人は試みたに違ひない。残念ながら、いろは歌を超える歌が出来なかつたのでせうね。だから發表を控へたと想像してゐるんです。私の様な無名人人間は平安時代のいろは歌の作者と競走する必要もないから、敢へて挑戦状を叩きつけて平氣であります。ただ、いろは歌の中にも一か所だけ文法上の

間違ひがある。ご存知でせうか。「我が世たれそ」の「そ」が間違ひなのです。「たれ」に「そ」と續けた日本語は一つもない。正しくは、我が世たれか常ならむ、と「か」でなきやいけない。これは江戸時代の黒川春村とか、明治になつてからの有名な大矢透先生。この方が厳しく指摘してをられます。さう言へば「たれか故郷を思はざる」「たれか夢なき」などと今でも「か」であるべきなんです。けど、こんな素晴らしい歌、それは判つてゐるけど、まあまあ事を荒立てないでといふので千年経つた。日本人は割に寛容ですから、A級戦犯をでつち上げていつまでも許さないといふ國とは違ひますからね。さういふ風に歴代の國語學者がいろは歌の失策をけしからんといふのですが、ではどう直したらいいかといふことに言及した方は一人もゐません。古今の名歌を添削するなどといふ大それたことは出来つこないんです。でも千年間も言はれつ放しでは平安の作者が氣の毒でしょ。そこで僭越ながら小生が直しました。これが實に面白いんですよ。私がいづらしてみた譯です。

まづ、いろは歌から修飾語とか助詞、接續詞など外せるものを外して必要な單語だけを残すんですね。すると次の様になります。

いろ○にほ○○ ちり○○○

○○○たれ○ つねならむ

うゐのおくやま ○○こえ○

あさきゆめみ○ ゑひ○せす

すると、は、へ、と、ぬ、る、を、わ、か、よ、そ、け、ふ、て、し、も、の十五字、それと、ん、の十六字が自由に使へますね。「か」は大矢透先生の命令で二行目の「たれ」

の後に入れて「誰か」とする事に決つてゐますし、「ん」は完全な七五調四行の今様體にする爲に缺かせません。そして「か」以外の十五文字をジロリジロリと眺めてゐたら、アール不思議や、いろは歌が次の様に變化したのです。

にほへるいろはちりぬとて 句へる色は散りぬとて

よをわふたれかつねならむ 世を侘ふ誰か常ならむ

うゐのおくやまけんそこえ 有爲の奥山嶮岨超え

あさきゆめみしゑひもせず 浅き夢見じ酔もせず

口で言へば簡單ですが、私はこの「いろは歌の替歌」を作るのに丸三日かかりました。この他にも、

句へる色は 怎麼生と

世を侘ふ誰か常ならむ

有爲の奥山 夢路超え

焦りて酔ひぬ 景色見ず

などと十首ほど作りましたが、何れも大同小異。前記の歌がまあまあ、本歌の味を残してゐる様なので決定版にしました。建築と同様で改築は新築よりも十倍ほど骨が折れるらしいのですが、文法上の間違ひを取除くといふ作業だけは何とか成功した譯です。

いろは歌の本歌から少し距離を置けば、作るのが幾分樂になります。それは、改築ではなく新築ですから、ある程度自分勝手に設計することが出来ます。例へば、

平成いろは歌

色は空なり すべて無爲

常に非ざる 世を佐びぬ

み佛まかせ 稚兒の夢

重き縁知れ 誰そや酔ふ

平安時代の本家のいろは歌は、涅槃經を和譯したと言ふ説があるが、私の平成いろは歌は色即是空諸行無常で般若心經の譯文みたいですね。本家の歌は莊重難解であり、分家の方は輕快平明とでもなりますか。まあ、私の歌は文法上の間違ひがないと言ふ一點に關してだけは、はつきりと古歌に勝つてゐる譯です。

かうした次第で、時間と根氣さへあれば、いろは歌の替歌だけでも山ほども出来ます。森羅萬象ごとごとく今様に

なりませんね。面白いでせう。皆さん、やつてみる人はぬないですか。

とは言つても、實はこれ大變なんですよ。私もねえ、一番最初に作つた時はずいぶんと時間がかつた。六十一歳の還暦を迎へた日に、還暦記念に圍碁のいろは歌を作らうと思つて始たんですが、どうしても出来ない。あと一字だけ處理すれば完成と言ふ所までは、まあ比較的樂に行くんですが、どうにもならない。三時間熟考しても出来ないから、もうやめたと放り出さうとした瞬間に一つだけ出來た。さあ、嬉しくて嬉しくてね。それから要領が分かつたんでせうかね。まあ、出来ること出来ること(笑)。一番短時間で出來たのはたつたの五分で出來ました。オツ、今日は頭がいいな、と思つて、もう一つ作つたら次は八分で出來た。私、氣分悪くなりましてね。出來たやうに見えるけど、出來てないのかも知れんぞ。俺、頭壞れたんぢやないかな、と思つて、その日はそれで止めた。また翌日作つてみたら、今度は三時間かかつても出来ないんで、やつと正常に戻つたのだな、と安心しました。三時間かかつて出来ない時はやめるに限りますね。人間の集中力といふのは三時間が限界だと、私の場合はさうなります。一般の方について論じれば精神集中といふのは五分も保てばいいとこですかね。

早い話が葬式の正坐なんか五分持ちませんからね。精神集中してゐる譯だけど。私なんかね。丸二日間くらゐ坐つてられますよ。だつて圍碁の對局中は一生懸命で足がしびれることに氣が附かないんです。私の作つた歌は皆さんの御手もとにあるパンフレットにありますから、これを見て頂くとしましてね。

次に申し上げたいのは、どうすれば、いろは歌が出来るか、こんな面白いものはないのですから、それについて御話します。いろは歌といふのは御覽のやうに七字と五字の組み合せ四行ですから、日本古來の文學にある程度は精通してゐなければなりませんね。特に日本文でございます。和歌、俳句、川柳、都都逸、すべてさういふものは七五調ですから、さういふものに慣れ親しんでなければいけないんです。幸ひといふか、私の親父が俳諧師だつたのです。連歌師。連歌師といつてもなかなか御解りにならんでせうが、俳句を作りますな。一句ね。それに別の人間が七、七と續ける。さうすると二人で作る和歌になります。五七五とやると、相手の方が七七と受ける。それで一つの歌が出来る。それを、ずつと續けるんです。一番少ない數で三十六かな。「歌仙」と申しますがね。「歌仙を巻く」といふ。親父はよく歌仙を巻いてました。これは、いろは歌ではなくて和歌

のスタイルですから、これを延々と續けて五七五プラス七七とずつとやつて十八回、非常に優雅な遊びで平安時代からあつたやうですが、これも親のことを云ふのは何ですか、名人だつたやうな氣がします。たちどころに出来ます。かういふものを九回やつて前半を終る。前半が終ると、選手交替して、七七をつけてゐた人が今度は五七五をやる。で十八連で最小單位の歌仙です。これが五十吟に、百吟にと、延々と續くわけです。お互に二人以上で一つの作品を作るわけですから、我がまは許されないうです。だから相手の附け句が氣に入らなければ、これはちよつとをかしいのぢやないか、と云つて喧嘩になるわけです。すつたもんだして親父はいろいろやつてました。さういふのを見てたものですから、なかなかこれは面白いものなんですね。

この一番最初の五七五を發句と云ひます。「一番目のを「脇句」と申します。それで一卷の終りの句を「擧句」といふのです。「擧句の果てに」の「擧句」です。親父は連歌の名人だつたんです。従つて日本語のさういふのは子供の時から見てゐたんです。私はこれを習はうとは思ひませんでしたね。だつて碁の方が面白いもの。しかし今となつては後悔してゐます。やはり習つてあげるんだつたなど。親父

に對して失禮な言ひ方ですが、習つてあげるんだつたなど。喜んで教へてくれたでせうね。だけど、習はなかつたから無駄になつたかといふと、さうではないんですね。私は二十年來、ある碁の雜誌で川柳欄を作つて募集してゐるんです。お客さんの川柳が五七五で來ますね。さうすると私が七七と附ける。全く、この歌仙と同じ要領で。例へば「冥土にも 碁會所ありやと墓に問ひ」とお客さんが言ふ。私が「蟻が出て來て有り」と答へる」(笑)と附ける。「飽きもせず大負け小まけで日が暮れる」。これは「夕焼こやけで日が暮れる」を本歌どりにした川柳ですね。それに對する句は「鳥と一緒に歸りましたよ」でしょ。私はそれを變へまして「鳥の勝手だ俺は歸るぞ」(笑)。

これをいろは歌留多にして、去年の秋出版したんです。京都に大石天狗堂といふ百人一首の老舗があつて、私も出版する以上は五百年か千年くらゐ保つものを作りたいと思ひましてね。これが、それでございます。なかなか立派でせう。そこにたくさんありますから、どうぞ。千圓で御座います。宣傳しちやひましたかな。でも、少なくとも、「犬も歩けば棒に當る」論より證據」よりはマシでせうよ。言葉の遊びで御座いますな。裏には四十八首のいろは歌も附けてサービスマシました。

さて、一つは申しましたけども、まづ、和歌俳句、さういふ日本古來の七五調に親しむべきこと、これはいろは歌を作る爲の絶対條件です。二番目は漢文です。宇野先生がここにいらつしやれば大喜びなさるかもしれません。漢字に親しんで漢文を學ぶこと。漢文といふのは實にヴォキャブラリーが豊富になりまして、日本語で一瞬のうちに凝縮したやうな素晴らしい表現があるんですよ。

まづ私が漢文を習つてよかつたと思ふのは、漢文を習はなければいろは歌なんか出來ないな、と思ふのは、舊制中學の——私が舊制中學に入つたのが昭和二十年で戦争が終る年ですね。舊制中學には立派な先生がたくさん居られました。舊制中學二年生の時に飯島忠夫といふ大先生にぶつかつたんです。飯島先生といふのは、私が十三歳の時に、もう八十を遙に越えて居られた。今生きていらつしやれば百五十歳くらゐですか。勿論江戸時代に生れた大先生です。

(板書)

この先生は學習院大學の名譽教授で昭和天皇の先生です。昭和天皇に御幼少の頃、國語と漢文を教へた。宇野先生に、あなた漢文をどこで習つたの、と訊かれました。いやあ、習つたなどといふものではないんですが、舊制中學で少し觸つただけです。いやいや、さうは仰られませんで。どこ

かで習はなければ、さういふ文章は書けないはずだ、と仰つた。實は飯島忠夫先生だと申上げたら、宇野先生がちよつと首を傾げられて、をかしいな、年が合ひませぬ、あの先生は私が学生の頃學習院の大先生だつた。先生の御講義なんとかして聞きたかつたのだけれど、學習院は東京大學より遙に格が上でしてね。さうですか。いい先生に習はれましたなと羨ましがられましたね。實はその頃飯島先生、戦争が負けたあとで、長野縣の松代に疎開し、隠居して居られた。その頃、上田中學校の校長が、飯島先生に一週間に一度、上田中學の子供の爲に御講義して下さい、と御願ひして、その時來られたのです。私、運よくその先生に當りましたね。當時は漢文と古文が選擇必修でして、百人生徒がゐれば九十五人までは古文を習つた。源氏物語、枕草子、などなどですね。そつちへ行つてしまふ。漢文を覚えるのは厭だ、といふので一クラスで多くて五人、少なくて三人。一學年で二十人くらゐが飯島先生にワイワイガヤガヤと教はるわけですね。私は飯島先生の授業を四年間受けたんです。これが實に素晴らしい授業でした。私が中學へ行つて良かつたと思ふことは、飯島先生の講義を受けられたことでした。飯島先生は授業が始まる五分前くらゐに教室に腰掛けて待つていらつしやる。當時はテレビなんかあ

りませんからラデオが晝休みの校内放送でニュースを流してゐる。たまたま或る時に國會が始まつて天皇陛下の御言葉があつた。昭和陛下の御言葉は、正直に云つてあまり上手な發音ではないなと思つてゐたのです。「私は、本日にここに諸君と一堂に會し、國事を議することを喜びとします」。すると飯島先生が何ともここにこして聴いていらつしやる。私は飯島先生のすぐ前にゐて、先生に質問しました。「陛下の御言葉は先生の漢文の讀み方にとてもよく似ておいでだと思ひますが、如何でせうか」と云ひましたら、飯島先生は居住ひを正されまして、「陛下には御幼少のみぎり御教へ致しました。陛下は誠に御實直な御性格であらせられ、私が御教へした通りに讀まれます」。それを聞きまして、昭和陛下の讀み方は最高に素晴らしいものだつたんだなと子供ながら解つたんです。飯島先生の眞似をちよつとやつてみませうか。こんな調子です。幕末の漢學者の御講義。

まあ、我々は論語を少々、唐詩も少々習つただけ。孟子、日本外史も少し習つたかな。しかし飯島先生の授業は一言も聞き洩らすまいとしますから、六十年経つた今でも、その授業を全部覚えてをります。何しろ相手が古今の大學者ですから・・・。

唐詩に「ガシシケイ顏眞卿ガ使ヒシテ河隴カロウ二赴クヲ送ル歌」といふ

のがある。少し長い詩です。かういふ調子なんです。飯島先生が「中山君、読んでみなさい」。私が立つて読む譯ですな。

君聞カズヤ胡笳ノ聲最モ悲シキヲ

紫髯綠眼ノ胡人吹ク

之ヲ吹キテ一曲ノ猶未ダ了ラザルニ

愁殺ス樓蘭征戍ノ兒

涼秋八月簾關ノ道

これ長いんですが、最後まで暗記してゐます。長恨歌百二十行、琵琶行八十八行程度なら今でも出來ますよ。私が記憶力がいいといふことではなくて、子供はみんな頭がいいんです。十で神童、十五で才子、二十過ぎれば並みの人といふから、私はまだ十三歳で神童の時ですから。もし途中でつかへたり読み方を間違へたりすると「はい結構です」と着席を命じられ、別の生徒に代る。私が無事に讀上げたとする。「大變よく出來ました。では今度は私がやつてみませう、

君聞カズヤ 胡笳ノ聲 最モ悲シキヲ——」。

誠に音吐朗々なんです、八十の老人が。語尾が明瞭です。區切るべきところは區切り、續けるべき所は續ける。そして何よりも作者の意を汲んで情景を想像しながら讀まなき

やいけない。飯島先生は決してそんなことは仰いませませんが、生徒たる者はそのやうに解釋するんですな。これ恰も「本日、ここに諸君と一堂に會し——」といふ天皇陛下の御言葉と全く同じなんです。我々生徒どもは、陛下の御言葉を聞いてくすくす笑つてゐる。今の陛下のやうに流暢な「私は本日——」これだつて立派ですよ。明治時代に生れた昭和天皇と、今の陛下は昭和八年生れでいらつしやいます。私は七年生れで一つ兄貴です。敢へて申しますと、昭和天皇の方が百倍くらゐ日本語が出來ます。

さういふことで漢文といふのは非常に大事なものです。この岑參の詩ですね。ここまで來た時に先生が漢文の教科書を机の上に置かれました。

涼秋八月簾關道 北風吹斷天山艸 崑崙山南月欲斜

今でも覚えてゐますが、「——崑崙山南月欲斜」(板書)

——ここまで來ましてね、飯島先生ちよつと止められました。聲を改めて、「素晴らしい風景ですな。見事な表現です」。かうも仰つた。「素晴らしい日本語です」。

飯島先生が最初に來た時は、偉い先生とは知らないものだから、生徒はみんな馬鹿にした。こんなちつぽけな老人が來たよ、と興味津々で見つてゐた。中學の二年生なんて生意氣盛りですからね。ある生徒が質問しました。「漢文と

いふのは今の支那語ぢやないですね。それに、行つたり來りして日本語のやうでもありません。日本語でも支那語でもないものを、我々はなぜ習ふ必要があるんですか」。天下の大先達にそんな失禮なことを云つたんですね。それで飯島先生なんて仰つたか。莞爾とされて「あゝ、大變いい質問です。確に漢文は今の支那語とは違ひます。日本語は假名と漢字で出來てゐます。漢字は何萬もあります。假名は四十八あります。假名だけでは日本語になりません。漢字だけでも御覽のやうに理解に苦しむ人が多いでせう。漢字は何千、何萬もあります。が、日本語の大事な部分を占める漢字が解らなくて、何で日本語が解りますか。漢文を學ぶことは、即ち日本語を學ぶことであります」と仰つたんですな。我々はへえーつと恐れ入つてしまつた。それから先生を尊敬するやうになつた。我々は何しろ十三くらゐのガキどもですからね。こんなものを手玉に取るのは先生にすれば簡單なことだ。

これはね、北と南が綺麗なんですよ。北があつて、南があつて、天山山脈があつて崑崙山脈がある。いい對句なんですよ。顔眞卿といふ書道の大家がある。この方が天子様の御使で西域へ旅行する時の、それを送る歡送會の席で作られたものです。北の方を見れば天山山脈から吹いて

來る北風が傍の草を引き千切らんばかりである。目を轉じて南の方を見れば崑崙山脈に月が將に落ちようとしてゐる。雄大なんですね。顔眞卿さんは馬か駱駝に乗つてその間を行く譯です。前方が遙なる西域ですね。後ろは今出て來た長安の都です。なるほど仰られて見ると素晴らしい景色だなあと解る譯です。飯島先生が「素晴らしい表現だな」と仰るから、生徒も解る譯ですね。「北風吹斷ス天山ノ艸 崑崙山南 月斜メナラント欲ス」で、講義が三十秒くらゐ停止した譯ですね。かういふ時は、必ず學期末の試験が學年末の試験にこの件りが出て來る(笑)。だから眞面目に授業に出席してゐれば、飯島先生の授業で百點を取ることはいとも易しい譯です。自分のことを申すのも何ですが、私は四年間ずつと飯島先生に百點を頂きました。試験前になると友達が來ましてね。「今度どこが出るか教へろ」と云ふ。「ここをやつとけよ。必ず出るから」。何がいかといふと漢文を習ふと語彙が豊富になるんですね。例へば、「そもさん」ですね。普通の人には九九パーセント知りませんよ。廣辭苑を引けば、ちゃんとあります。

まあ、いろは歌。今は五十音で御座いますよ。外國ではそれぞれの國が國語を大事にしますね。獨逸へ行かうがオランダへ行かうがフランスへ行かうが、その國の言葉以

外は返つて來ませぬ。日本では驛や空港にローマ字が併記してあります。この頃は韓國語や中國語の案内も書いてあります。これ、ちよつと胡麻すりぢやないかと思ひますね。日本へ來るなら日本語を勉強して來い、と私は言ひたいのですが・・・。逆に私が中國へ行けば筆談が實によく通じるんですね。漢文を齧つたおかげで、竝の中國人よりも漢字を知つてゐますから。

日本語に較べれば英語なんて簡單なものでせう。例へば「あなた」といふ言葉は、日本語には二十も三十もあるでせう。君、お主、あんた、貴殿、お前、汝、先輩、閣下、などなど。英語には幾つあるんでせうか。唯一つ、YOUがあるだけです。便利と言へば便利ですが、親に向つてもYOU。大統領、大先生に對しても、宇野先生に對しても「お前」とYOU。(笑) 味氣ない事甚だしいですなあ。

私はね、外國へ教へに行つて英語で講演しますよ、生意氣にも。舊制中學一年の教科書を幸ひにも丸暗記してゐた。それだけで充分に通じます。ただ、これには條件がありまして、會場にあるのは全員碁打ちで私の弟子ですから、山の英語が解らなければ困るんですね。死に物狂ひで聽いてくれる譯です。例へば圍碁の「読み」についてですが、

I shall begin this lecture by saying that very few persons

know how to read・・・

これは超一流の大學教授の英語です。ラフカディオ・ハーンといふ方がいらつしやいましたね。日本名は小泉八雲。日本に溶け込んで日本人になつた人ですが、元はイギリス人ですね。この方が東京大學で初めて講演した時の出だしがこの一節です。私の中學の時の英語の教科書に出て來るんですね。それをふと思ひ出したので咄嗟に拜借して、

アイ、シャルル、ビギン、ジス、レクチャー、バイ・・・(笑)
これは實に簡單だよ、といふ言ひ方は中學の教科書で習つてゐなかつたんですね。後でアメリカ人に聞いたら、イツツ、イージー、と言ふらしいんです。話し言葉でせうが、イツツなんてそんな蓮つ葉な言ひ回しは教はつてゐませんから、さて我がキングズイングリッシュは何と言ふべきかと考へ込んだ所、教科書の一節を思ひ出しました。

Nothing could be more simple. (笑)

日本語に譯しますと、かほど易しきことは有るまじ、と言つた様なものです。格調高き我が英語を聞いてゐたアメリカ人達は一瞬静まり返りましたが、やがてドツと笑ひ出しましてね、センセイ、さつきまで小學生の英語を使つてゐたのに、急に大學教授になられては非常に困る。ヘルプ、ミー。(笑) かつ言ふ譯ですから、私の英語は實によく通

じてゐる。二時間の講演なら、相手は一時間は笑つてゐるんです。私は一時間喋ればいいんだから非常に樂なものです。

たまたま日立製作所の副社長さんが視察に来てをられましてね、

「先生大したもんだね、英語で落語をやつてのけるなんて」と目を丸くしてをられました。とんでもない。私は舊制中學一年のリーダーを丸暗記し、四苦八苦してゐるだけなんです。

だけど昔の舊制中學はすごかつたと思ひますねえ。

どうもね、無理矢理今の大學程度の教育をしてたんぢやないかと思ひますなあ。私のゐた中學は不思議なところで、大抵の中學は、戦時中ですから、敵性語の英語なんてまかりならん、と言ふ譯で英語の授業なんてないんです。ところが上田中學では校長が英文學者だつたんです。教頭がまた英語の教師だつたんですね。で言ふ事がいい。英語が判らんやうで戦争が勝てるか、と。さう云はれてみると確かにさうなんです。若い英語の教師たちは全員が戦場へ行くつちやつて授業が出来ない。そこで校長と教頭が交替で大講堂に生徒を六百人ほど集めまして、「This is a pen. デイスイズの「ズ」が私うまく發音できなくて、教頭が

睨んでゐまして、お前は馬鹿か、とののしるんですな。今になつて思へば、そのやうな下等な言語を習ふよりも日本語を習へ、と言ひ返したい心境です。特に碁學。碁を習へと言ひたいですねえ（大笑）。

結論として、まづ最初に、世界に冠たる「いろは歌」を教へるべしと言ふのが我が主張であります。

御清聽、有難う御座いました。



(なかやまのりゆき・日本棋院棋士、六段)

第七十八回國語講演會平成十八年五月十三日於日本俱樂部

外交と日本語

岡崎 久彦

(質問者 萩野貞樹)

萩野 最初に今日の講師、岡崎久彦さんの御紹介をします。

今から三十年ほど前でせうか、文藝春秋の雑誌『諸君!』の中に「隣の国で考えたこと」といふ連載物が載り始めて、これは恐るべき文章が出たと毎月首を長くして待つて讀み耽つたものです。この時は別のペンネームだつたのですが、後で岡崎先生と判り、やはりさうだつたかと思つたことがあります。『隣の国で考えたこと』は、確かエッセイストクラブ賞を受賞してゐる筈です。先生は、サウジアラビア大使、タイ大使その他を歴任されて、現在は外交官そのものは退いてをられるやうですが、國際問題に關して様々な啓蒙をして下さつてゐると同時に、要路の方面にも情報提言を様々な形で寄せてをられる方であります。

いつか隨筆で學生時代、東京大學の法學部で、どうして東大の學生たちはこんなに英語ができないのだらうかと思つたといふやうなことを書いてをられたことがありまし

た。先生は英語だけでなく幾つもの言語に堪能なわけですが、語學に關して、さぞ痛快な話が色々あるだらう、それを伺へればいいといふ心が實はあつたのですが、それはまた別の機會に伺ふことにしまして、今日はまた、少し違つた面から國語問題にも直接關るやうなお話が伺へるだらうと思つてゐます。それでは先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

岡崎 中山典之先生の「いろは歌」の御話に大變、感服してをります。學識も構成も話術も、私如き者はとても對抗できませんので、ただ、面白かつたといふことだけ申し上げます。

實は今回のお話は、こんなに困つたことはありません。「外交と日本語」といふ題を頂きまして、うっかりお受けしたのですが、ひと月くらゐ前から、どうも困つたと思ひ悩んでをりました。

外交と日本語は、何の關係もないですね(笑)。我々が苦勞してゐるのは、如何に英語をうまく喋つて相手を説得することができるかといふことでして、日本語は關係ないですね。ひと月前に「もうやめる、無理やりやらせるならお金は要らない」と申し上げましたが、とにかくやること

になつた。しかも自分が知らないことを喋るとなると、準備に物凄い時間がかかる。これほど時間をかけたことはありません。

それでも何を話していいのか解らないので、色んな勉強をしました。

在日外交官の間で「なんとか平成會」といふのがあるんですね。日本語のできる大使が集つて作つた會で、アマコスト大使が始めたらしい。その中で今、割合日本語がうまいのは、フィリップンから來てゐるドミンゴ・シアソンさん、イギリスのグレア・クライさん、此の二人が話をするといふので、私は普段は關心がないのですが、今日の講演の参考にと思ひ、先々週、聴きに行きました。話を聴きましたけれども、何にも今日の参考になりませんでした(笑)。言つてゐることは、端的に言つてしまへば、片言で如何に日本人に日本語を通じさせるかと、その苦勞だけです。日本語とか國語にとつて深みのある話などは全く聴けませんでした。誰でも想像できるやうな、ほんとに初歩的な話だけです。とくに丁寧語ですね、敬語。これが難しい。こんな話は、今さら國語問題協議會の先生方に御話する内容ではないですね。

ただ、聴いてゐて一つ感じたのは、日本にゐる外交官の、

外人の日本語の質が非常に落ちたといふことです。外交官といふのは、例へば二十年ほど前日本に居たコルタツチなんていふ人は、みんな戦争中に日本語を覺えた人です。この人は漢語の表現などを驅使して話し、こちらの言葉の使用ひ方が悪いと、向ふから咎められたりしました。それくらい日本語が出來た。

その前に、例へば私が三等書記官でフィリップンへ行つた時も、フィリップンの英國大使は日本語の専門家で、本當に日本の古典を全部知つてゐて、半ば冗談ですが文語文と言ふか候文のやうな表現で話して呉れました。

それに較べれば最近の人は片言が出来る程度ですね。片言といふのは不正確ですが、云ひたいことの内容を正確に傳へるだけです。それは出来る。それ以上の日本語の教養はない。

それは結局日本といふ國の地位が低下したからです。つまり大日本帝國があつて、獨逸と日本が米英の主敵だつたから先方も一所懸命勉強するんですよ。

たとへば、アメリカの外交官にしてもですね、私がまだ若い頃の例へばアメリカの次官をやつてゐたアレクシス・ジョンソンとか、極東次官補だつたマーシャル・グリーンとか、皆戦争中にグレイ大使あたりと一緒に働いた人たち

です。當時は日本が主敵ですから、一番優秀な人たちが日本語を習つたのです。これは自然の勢ひでどうしやうもないことです。

ハーバードのロシア・スタディと言へば、冷戦時代は、飛び切りの秀才ばかりで、みんな教授、助教で、ロシアの政治經濟、ロシアの軍事、ロシアの社會國民性に至るまで徹底的に分析して、國務省にもしよつちゆう出入りしてゐる、國際政治研究の花形だつた。

ところが、この前の戦争が終つた頃は、ハーバードでロシア關係の教授はただ一人しかゐなかつた。しかもその人の専門はドストエフスキーだつたと言ひます。といふことは、第二次大戦中は、全然ロシア問題などに關心がなかつたわけですね。そして、よく出来る人間は日本語をやつた。さういふ時代があつたんです。

その當時に較べると、今の外人の日本語は、つまり、戦後の日本語は、用件が通じるだけの言葉になつてしまつた。日本の文化や國民性を深く理解する實際上の必要が全くなくなりました。また、後でも述べるやうに、日本語自體が自らのスタイルを失ひました。日本語のスタイルを覺える必要が全然なくなつてしまつた。誠に残念で昔懐かしいんですが、これはやむを得ないことなのでせう。

逆に、日本の外交官で、獨逸語、フランス語の能力がカクンと落ちた。これは恐るべきものです。まだ二十年くらゐ前ですか、戦時中の獨逸スクールが一番盛んだつた頃の大秀才の大使たち、牛場信彦とか、法眼晋作とか、さういふ人が澤山ゐた頃の話です。ある會議で獨逸のお客さんが来て、通譯が獨逸語の通譯をする。その場で、牛場さんや法眼さんが「あ、それは違ふ、間違ひ、それも間違ひ……」と一々言ふので、通譯ができなかつたくらゐだつたさうです。一言譯すと、もう「違ふ」とやられる。全然水準が違ふんです。

昔、舊制高校で三年間獨逸語をみつちりやつた。大學でも獨逸語の原書を読んだ。それから獨逸へ留學した。今は教養學部で第二外語。昔の文乙と云つたら、一週間何時間あつたですかね、獨逸語の授業が。今は第一外語ですから、せいぜい週に二、三時限でせう。それで外交官になつたら、海外留學させてもらつてゐるだけの獨逸語ですから、昔の人と水準が違ふのは當り前ですね。

これもまた、國際場裡における獨逸とフランスの地位の低下を表してゐます。昔の外交官は、英語と獨逸語とフランス語の新聞が同時に讀めないし外交官が勤まらないと言はれた。今は讀む必要がない。英語だけ讀めればいい。こ

これは日本についても當てはまると思ふ。日本に来てゐる外交官は、そもそも日本語を読む必要が無いのかも知れない。まして、日本語の教養といふものを必要としなくなつてゐるのは想像に難くない。

さういふ譯で、外交と日本語と云つても、何を云つてゐるか、通じればいいだけの日本語ですね。それしか要らない。ところが、それはそれで日本語の需要が高まつてゐるらしい。例へばアメリカのジョージア・テックといふ技術關係の大學ですが、數年前に、日本學部が新設された。そこに希望者は澤山あると言ひます。どういふ譯かと聞いたら、技術關係の人は日本語の文獻を読まないと思付かない。他の國の資料は皆英語で讀めるが、英語の文獻以外では非讀まなくてはいけないのは日本語の文獻だ。これを讀んでおかないと技術の進歩に付いて行かない。なるほど、さう言ふこともあるかと思ひます。そして技術關係の言葉といふのは、これこそ意味が通じればいいんですからね。文化とか教養などには必要ない。さうすると、外人の日本語は、大體さういふ傾向になつて來てゐる。さういふ感じですよ。「外交と日本語」といふことでは、もうこれ以上御話しすることはありませんが、英語の學習と言ふことで、私の乏しい經驗だけを少しばかり申し上げますと、英語は正に先程

中山先生が仰つたのと同じなんです。私も舊制中學の英語ですね。私は三年までです。戰爭が終つたのは舊制中學三年の夏です。それから後は英語はやつてないです。東大の試験、外交官試験を受けるまで英語はやつてないですね。東大の英語の授業には出なかつた。程度が低いんですね。戰爭と敗戦の混亂があつたからです。混亂の後ですから質が落ちてゐて、あまり馬鹿馬鹿しくて出る氣がしない。これ、自慢のやうになつてしまひますが、さうしてゐるうちに、一度も出ないのでは點のつけやうがない、だから出て來いと云つてゐる、といふので一遍だけ出ました。それで「ここを譯せ」といふので譯したら、一番いい點を取れました。

戰爭前の舊制中學の英語は本當に水準の高いものだつたと思ひます。中山先生が、江戸時代の水準の日本語の知識をちやんと持つてをられる、恐らく若い方に傳へて頂いてゐると思ひますが、さうでないと思つて途切れてしまひますから。

私の祖父は、私が六歳の時に死にましたが、毎朝會つてゐましたからよく知つてゐるのですけれども、祖父の初陣は鳥羽伏見の戦ひ（笑）。十五歳か十六歳ですね。教養といふものは、もう出來上がつてゐますから、江戸時代の人

間です。だから私は江戸時代の人間が解るんです。中山先生や私は、江戸時代の人間が解る最後のジエネレーションなんですね。これは、やはり後に傳へなきやいけない。私もさう思ひます。

「外交と日本語」で御話し出来るのは、これで全部ですが、私の経験で若干でも國語問題の御役に立つかなと思ふことは二、三あります。私は、戦後初めてケンブリッジに参りました。今の連中は子供の頃から外國へ行つたり、高校時代にいろいろ短期留學の制度があつて一年留學したりして英語が出来るんですが、私は講和條約を署名してから發效までの一年の間の外交官試験です。當時日本人で外國に行けるのはガリオアとか、さういふ連中だつた。私は二十三歳で初めて外國に行つたんです。もともとヒヤリングが餘り良くない上に、二十三歳といふのは英語を覺えるには遅いですね。外務省にはリングストと呼ばれる人も澤山おまして、語學の達人がおりますが、私はリングストではありません。

それがケンブリッジに居りまして、何とか英語を喋らなければならぬ。どうやつて覺えたらいいのか。さうしたら、ある印度人が「考へるのが英語だつたらいい」と云ふ。さうでせうね。印度人は今でも全部英語で考へるんですよ。

ね。さうでない、あれだけ英語ができないですからね。さうか、といふことで英語で考へることにした。お腹が空いたら「アイ・アム・ハングリー」と考へるんですね(笑)。四六時中、ちよつと日本語になつたら、すぐ英語で考へ直す。それが結局、今の英語の基です。

さうしますと、難しいことは云へないですから、全ての構文を、主語が一つ、述語が一つ、それをアンドかバットだけで繋げる。これはやつて見ると出来ませう。それが人間の言葉の基本ですよ。もたもたした構文といふのはなくなりませうね。

全ての構文はアンドかバットだけで整理できます。それ以外は、スタイルがあればいいのです。つまり決まり切つた物の言ひ方ですね。日本語で云へば漢文口調とか言ふことです。

これで文章を書きますと、當時英語は「シンブルイングリッシユ」が良いといふことになつておまして、さう言ふ本も出版されてゐたぐらゐで、結構良いと言はれる英語が書けるんです。ただ、こればかりやりますと、單調になつてしまふ。しやうがないんで、所々ラテン系の難しい單語をばつと入れる。例へば「シヴィライゼーション」といふ言葉は「ゼイション」がついておますからラテン系で

すけど、ほかは軽く話して、途中で「シヴィライゼイション」と大きな聲で勿體らしく發音すれば良い（笑）。さうすると大體英語の形になるんです（笑）。

未だに私は、日本語も英語も全部それです。結局、あの時に「英語で考へる」と云はれたのが、英語についても日本語についても、私のスタイルの基になつてゐる。これは非常に樂です。發想が先にあつて、それを如何に説明するかといふことなんですけれど、英語といふやうなものは、自分の國の言葉ではないですから眞似しても眞似しても英國人と同じにはなりません。

私自身の經驗ばかり云ふものですから自慢みたいになつてしまふんですが、それが私にとつて全てのスタイルの基になつてゐます。

最近たまたまド・ゴールの大戦回顧録の解説を頼まれ、その序文を読み直す機会がありました。

この翻譯は一九六八年度のポール・クロードル賞をとつた名譯ですが、三十年経つて復刊の折に譯者村上光彦氏がもう一度自分で不満足と思ふ箇所を譯し直したといふ良心的な翻譯です。

誠に堂々たる正確な譯です。ただ、それでも日本語として讀みづらい所があります。以下は引用です。

「生涯を通じて私は、フランスについてある種の觀念を胸のうちに作りあげてきた。感情のみならず理性もまた、私の心に、それを吹き込むのである。私のうちなる情的な要素は、おのずとフランスを、お伽噺の王女さながら、ある卓越した類例の無い運命にさざげられているものと思ひます。そして神はフランスを完璧な成功かさもなくば見せしめ的不幸のために創造したのだという印象を、私は本能的に感得している。それにもかからず、たまたま、フランスの行爲や身振りが凡庸さの刻印を帯びるのを見ると、祖国の真髓にではなく、フランス人の過誤に帰せしめべき、何か理に合わない異變といった感じを受ける。すなわち、フランスが本當におのれ自身であるのは、それが第一級の地位を占めているときだけである。つまり私の考えでは、フランスは偉大さなくしてはフランスたり得ないのである。」

そこでをこがましいのですが、私が四〇年前に大使館二等書記官としてパリに居たとき、おそらく村上氏の翻譯とちやうど同じ頃、翻譯したテキストをご紹介させていただ

きます。

「生涯を通じて、私はフランスについてある特別なイメージを抱いてきた。このイメージは理性によると同時に感情によつて創り出されたものである。」

私の感情の中にあるフランスは、お伽話のお姫様プリンセスのように、他に卓越し、他に類を見ない運命に導かれているものである。私は本能的に、フランスは神の摂理により、完全な成功を享受するためか、さもなければ、神の試練を受けるために創造されたものと感じてゐる。

もし万が一、フランスのすることの中に、そのどちらでもない平凡なものが見受けられるようなことがあれば、私は、そこに、話にならない異常さを感じる。その異常さは、もとより祖国の優れた天性に基づくものではなく、その時代のフランス人の過失に帰せられるべきものである。私はフランスは第一級の国でなければ本当のフランスであり得ないと確信している。

一言にして言えば、私の考えでは、偉大さのないフランスはフランスではあり得ない。」

これをお読み頂ければ判ると思ふのですが、私の文章は全部、アンドとバットだけの構文です。關係代名詞を必要

とするやうな構文はありません。それで私の譯の方がわかり易いと言つていただければ——押し付けがましいのですが——それが私が申し上げたいことの全てです。

これは、元はフランス語ですけども。私は外務省に在りまして、部下が持つて来る英語の翻譯がどうも解り難いんですね。その場で書き直さないと翻譯にならない。どういふことかな、と思ふんですが、外國語といふものを外國語としてその通り譯さうと思ふと駄目なんだと思ひますね。内容を把握して、それを自分で理解して自分で説明しなくては駄目ですね。多分、さういふことだらうと思ふんです。例へば現在の日本語は、全部逐語譯の翻譯みたいなところがあるんです。文章の調子が出て來ないんです。それとやはり文章のスタイルです。

文語の苑の仲間、と言つては失禮で、尊敬すべき先輩なのですが、市川浩さんといふ方が居られます。その方が會報に投稿された文章を抜粹してご紹介します。

嘗て貧しくとも高貴なりし日本人の今や必ずしも富まざりてかくも野卑となりたる原因の一つに識者しばしば國語の荒廢を擧ぐ。……最近の極く一般的なる口語文「重要ナコトハ誰モガ安心シテ醫療ヲ受ケラレルトイフコトデアル(ラウ)」これを文語文に草するに

「重要なるは誰もが安心して醫療を受けらるゝことなり」
などとするは翻譯口語の文語譯となり果つ。推敲の例を擧
ぐれば

「萬民醫療を受くるに齊しく安心あるこそ肝要なれ」或いは
「萬民齊しく心を安んじて醫療を受く、これぞ國の基なる」
かくして最初の口語文を「誰モガ安心シテ醫療ヲ受ケル、
コレガ重要デアル」とせば、簡潔要を得べし。

・直截雄勁なる口語體建設の要今日より大なるは無し。
これを思ひ先づ原點に立戻りて文語の遺産を繼承し、口語
體の發展に資せばやとなむ。これ文語の苑活動の大いなる
一側面なるべく、有志の人士更に参加せられむことを。(平
成十八年四月八日)

誠にお説の通りです。市川氏のお説の一番いい例は、陸
奥宗光が翻譯したベンサムの『道徳及び立法の諸原理序説』
です。

皆さんご存じのやうにベンサムといふ人は、例の「最大
多数の最大幸福」といふことを考へた人ですね。だから刑
法の基を作つた人です。つまり、人間が人間を罰するとい
ふのは恐ろしい話です。特に中世以來のイギリスは嚴罰主

義ですから、非常に殘酷な罰を加へた。そんなことが正義
の名の下で許されるのだらうかと言ふ疑問から發してゐま
す。といつて、悪い奴がゐる限り罰を加へない譯にはいか
ない。ぢや、どうしたらいいかと彼は考へたんですね。そ
れは、悪い奴を罰すれば他の人間が幸せになる。罰を與へ
られた人間は不幸せになる。結局、その幸せの總量と不幸
せの總量を較べて幸せの方が多ければいいんだといふ考へ
なんです。

大體人間といふのは快樂と苦痛の二つ——快樂を求めて
苦痛を避ける——その二つしかないんだ。快樂を最大限
にして苦痛を最小限にするやうな刑法を作ればいいんだ。
さういふ考へですね。それをここで説明してゐる譯です。

これを英語で Every effort we can make to throw off our
subjection, will serve but to demonstrate and confirm it.
In words a man may pretend to abjure their empire, but in
reality he will remain subject to it all the while. といつて
あります。

それで、これを西村さんといふ立派な法律家が譯したん
です。「だから兩者に對する私たちの服屬關係から逃れよ
うとして、どんなに努力してみたところで、所詮この服屬

關係を證明し確認するだけのことであらう。人は、この兩者の君臨してゐる帝國から離脱してゐるのだと口先だけでは云ふことが出来よう。ところが現實には、その間、どこまでも兩者に服してゐるわけである。」

これは正確な譯ですね。文句のつけやうのない立派な譯です。しかしこれを陸奥が譯した。

「もし試みにこの羈絆を逃れむと企謀せば、いよいよその羈絆の堅牢なるを証見するのみ。決して片時もそれを逃るる能はず。但し、人、あるいは實に畢生の間、苦樂のために拘束せられながら、なほ、われ能く苦樂の疆域を離去せりと妄言する者あるのみ。」

これは、今讀んだだけでも陸奥の方が解り易いですね。しかも、この方が短いですよ。この西村さんの譯が三行半、陸奥宗光は二行半ですね。

しかも、「もし試みに」などと云ふ、厳格な逐語譯からすれば不用な餘計なものまで付いてゐてそれで短くてわかり易いのです。これは一體どういふことかと思ふんですね。最後に私が、どう譯すかなと思つて譯してみたら、これはもう何でもないんで、

「服屬關係から逃れようとすればするほど」とすれば良い。「すればするほど」といふスタイルがあつてもいいですよ

ね。」——すればするほど、その存在を確認するだけだ」と。この社會から脱してゐると稱する人がゐても、實際にはその支配下にゐて、いくらもがいてもダメだ、とさう云ひただけなんですよ。

初めの翻譯だと、いい翻譯なんだけれど、文章を初めから終りまで讀まないの意味がわからない。ところが、眞つ先に「試みに」と來て「のみ」で終つてゐると、間の文章は漢字の拾ひ讀みだけで文意がわかつてしまふわけです。つまりスタイルがあるか、無いかの問題です。スタイルが無いと言葉を一つ一つ拾はないと意味がわからないわけです。

さつきの市川さんの例では、まづ文語で考へてから現代文にすると良い現代文になる。また英語を喋る時に、まづ文語で考へてから英語にするとメリハリのきいた英語になる。これは、どういふことかなと思つてみました。勿論、文法は中國語と英語の方が日本語より近いですよ。それがあるかな、といふ氣もしてみました、それだけぢやないですね。

現代文がスタイルを失つてゐるのです。英語とか、文語文は長い歴史と傳統を守つてゐる言語です。特に漢文の訓み下しの文章といふのはスタイルがあるんですね。みんな

書く時にスタイルを考へながら書く。ところが、今日日本語は、誰もスタイルを考へない。意味が通じればいいといふことを、ただ、だらだらだと云つてゐるだけです。これが、逆に解り難い。

そこで我田引水になつて「文語の苑」なんですけども、文語教育、特に漢文の訓み下し教育ですね。つまり、漢文教育。これはやはり小學校、中學、高校で、もつときちんとしてやるべきだと思ひます。さうでないと、人間の言葉でない人工的言語になつてしまふ。スタイルがないことになる。それがつまり日本語の現代文です。

ここから先は本題から離れて「文語の苑」の宣傳になりますが、陸奥宗光の文章にご關心があれば、文語の苑のホーム・ページを開いて陸奥宗光の『蹇々録』ケンケンロクをお読み下さい。文語體のスタイルの粹と言つて良い様な出来榮えです。

何かこれだけの方々を前にしながら、宣傳と自慢だけのお話になつてしまつた感があり、内心忸怩たるものが御座いますが、このあたりで終らせて頂きます。

萩野 有難うございました。外國の言語に關しては、外交上の重要さをどうとらへるかによつて、その言語の實力が

大きく左右されるといふのは、なるほどさうであらうと思ひますが、改めて面白いご指摘だと思ひました。それで、ちよつと思ひ出したことがあるんですが、十何年も前になるんでせうか、金丸信さんが北朝鮮に行つた時、金日成と會つたのですが、通譯は向うの人だつたやうですね。それで金日成が「先生よくお出で下さいました」といふ風に歓迎の鄭重な挨拶をしたやうに通譯されておりましたが、あれは全く目下相手の言葉だつたさうですね。朝鮮語にはちやんと目下相手の言ひ方があり「パンマル」といふんださうですが、それがはつきり使はれてゐたといふことを吳善花さんが『スカートの風』で言つてゐます。さういふ事を考へると、確かにこれから重要であるところの朝鮮半島の言語について、こちらの實力を飛躍的に高めて行かなければならないものだらうなといふことを改めて感じた次第です。ところで、先生の御書きになるものは普段拜見してゐる文章で云ひますと、非常に文章が解り易い、易しい。しかも非常に論理的ですから、素直に頭に入つて來ます。これは恐らく若い頃から日本の古典の中で、或いは漢詩文の中で成長なされたからではないかと睨んでをるわけですが、どのやうな勉強をされて來たのか、御話を伺へればと思ひます。

岡崎 私は、日本の文學は解りません。俳句ひとつひねれない。子供の頃から何十回讀んだか解らないのは『十八史略』ですね。それと『史記』。それよりも一番基は『春秋左氏傳』ですね。恐らく『十八史略』も『史記』も、その文體を眞似して書いたものでせうね。『左氏傳』は一つの國の歴史だけです。今それを讀んで得る歴史的知識は餘りないんですね。それよりも漢文のスタイルの古典です。

萩野 さういふことだと思ひますね。私どもの年齢の少し先輩である岡崎先生になると、既に漢文訓み下しの訓練が桁違ひだなどいふことを感じます。森鷗外が、若い青年が傍に来て、文學の修行には何がいでらうか、教へてくれないかと云ひますと、左傳を繰返し讀めばいいんだ、それ以外には何も無いといふ風に教へてゐたさうですね。ですから私なども、いくら遅くとも讀みこなさなければならぬものだらうと思ひますが、なかなか難しい。要するに私たちは、漢詩・漢文、ああいふ引締つたものに常に觸れてゐなくてはならないのだと思ひます。實は會場の後ろのほうに展示して販賣してゐるのですが、『英才を育てるための小学校國語副読本』（PHP研究所）といふものがあり

ます。これは私と石井公一郎先生とでまとめたものなんです。漢詩・漢文も遠慮なく採り入れてゐます。例へば『論語』や『大學』、李白の詩などは一年生から與へるやうになつてゐますし、『孝經』の『身體髮膚、之を父母に受く。敢へて毀傷せざるは孝の始めなり』などといふものは白文と訓み下しで二年生に與へるといふ編輯になつてをります。これは考へてみれば特別なことではなくて、少し前の人たちは三つ四つ五つぐらゐの時に漢文の素讀を受けてゐたわけですね。山鹿素行が『配所殘月』で述べてゐますが、自分は六歳の時に勉強を始めた。しかし頭が悪いものだから四書五經、七書詩文の書をおほかた讀み覺えるのに八歳までかかつた、などと言つてゐる。この八歳といふのは今で言へば小學校に上る年齢ですね。別に素行は、秀才だからといふので學んだわけではありません。數へ六つの子供ならいくら素行でもただの幼兒にすぎなかつたでせう。それでもさういふ基礎訓練をしてゐた。その上での學問・教養だつたのだな、といふことがよくわかるのですが、岡崎先生も何か似たことがあつたのではないか。幼いころの経験談でも一つ二つご披露いただければと思ひますが。

岡崎 幼い頃は何もしてゐません。『春秋左傳』は文章が

いいんでせうね。中の史實は餘り意味がありません。文章については、荻生徂徠が云つてますね。何か讀むんだつたら『春秋左傳』と。

「冗談として申上げますが、私は、まだ極祕で外へ出してゐませんが、サウジ・アラビア滞在記を書きました。そのときに、初めは、左氏春秋傳と名づけました。左氏を「サウヂ」と讀むんです（笑、拍手）。

次いでに冗談をもう一つ——中山先生の御話を聞いて思ひ出したんですが、いろは歌に都都逸があります。「四つ五つからいろはを覚え、はの字忘れて色ばかり」（笑、拍手）。

萩野 先程の御話にありました文語の苑は數年前、岡崎先生ほかを賛同者として設立された、文語を讀んだり書いたりしてお互ひに楽しみつつ勉強しようといふものですが、それがインターネットに繋いで行はれる、その中で御茶の水女子大學には學生たちのサークルがあつて、文語の苑の支部のやうな形になつてゐます。そこへ我々が出かけて行つて、書いたり讀んだり、作文をして見せ合つたりして一緒に勉強してをります。岡崎先生は、その會合にはあまりおいでにならないのですが、今度は御茶の水女子大學の方へも出来るだけおいでいただきたいと思ひます。

岡崎 はい。（笑）。

聴衆某 外交と日本語といふことで、外交官の日本語のレベルが下つたといふことを先程聞いて、それは日本のステイタスが下つた。もう一つ、日本語をやらう、日本の文化をやらうとする場合は舊假名、そこに行く。戦前と違つて、今日本語をやるのが二つに分れてしまつてゐる。このことの影響といふのではないものでせうか。

岡崎 昔の外國人は舊假名を全部知つてゐましたですね。最近是新假名で何とか話を通じればいいので、その日本語だけやつてをります。日本の文化、文學、日本の文明まで知らうとして日本語をやらうといふ人は本當にゐなくなりましたね。

別の意味で感心したのはイギリス大使のグレアム・フライといふ人です。外國語の中で一番難しいのは日本語だと云ふから、ぢや、それをやると云つてやつてみた。ところがやつて見ると本當に厭になつたさうです。漢字をただただ暗記するので、あんな辛いことはなかつた、と。

だげど彼は頑張つたさうです。どうしてかといふと、日

本はやはり、これだけ大きな國だ、産業も技術も進んでゐる。だから、日本語が判る人間を作るのは、イングランドのためだ。つまり、お國のために頑張つたんですね。さうでせうね、日本の文化に關心なしで、日本語だけ覺えるのは拷問のやうな作業でせうね。

聽衆某 さういふ實利的な意味ですね。

岡崎 明治から昭和初期までは、日本文化といふ世界でも稀な文化を造り出した日本の國を勉強して、その神髓を理解しようとしたラフカディオ・ハーンのやうな人がゐましたが、さういふ人はもうゐないでせう。東大やお茶の水あたりに入學してゐる人に一人か二人はゐるのでせうか。

萩野 今はなんでも口語になつて締りがなくなりました。もう十數年も前になります。昭和天皇の大葬の禮、葬場殿の儀では天皇陛下が誄（ルイ・しのびごと）をお讀みになつたわけですが、「明仁謹んで御父昭和天皇の御靈に申し上げます」といふ言葉が始まります。もともとは「ああ悲しい哉」で締めたはずの文末も「誠に悲しみの極みであります」となつてゐた。また即位禮では海部首相の「壽詞（よ

ごと）」は「謹んで申し上げます。天皇陛下におかれましては……」と始る。どうもがっかりでした。昭和二十七年の立太子禮では、加冠の儀の後の奉禮のお言葉は、「茲ニ禮ヲ供ヘ明仁ニ冠ヲ加ヘタマフ洵ニ歡喜ノ至ナリ今ヨリ愈々思フ身位ニ致シ童心ヲ去リ成徳ニ順ヒ温故知新以テ負荷ノ重キニ任ヘムコトヲ期ス」といつた文體でした。私などはかうしたものの復權を夢見るわけですが、それはともかくとしてこれからの文體といふことに關聯して何かお考へをお話いただけませんか。

岡崎 文體、現代語のスタイルを作ることとは可能だと思ひます。戦後の文體で一番感心したのはビートたけしの自傳ですね。實に流れるやうで全く淀みがない。これは一種の天才の文體でして、誰にも出来る譯ではない。誰もが出来ること云へば、やはり古典、古文ですね。日本の古典でもいいし、私の場合には訓み下し漢文ですけれども、それをじっくり覺えればスタイルは自ら出てきますね。今のやうな御話を聞くと、本當に厭ですね。さういふ莊重な場で、締りのない言葉で語られるといふのは……。やはり古典教育が必要だと思ひます。

聽衆某 外交における翻譯のことですが、敕語が英語になるのは、どういふ風な過程でなるのか、非常に氣になるんですが、開戦の詔敕とか、終戦の詔敕とかは何時誰が書くのでせうか。

岡崎 明治以來出來て來た詔敕の型をそのまま使つてゐるんでせうね。それならそれで良いのですが、さうでないと、しまらないことになる。

萩野 どうも有難うございました。

(をかざきささひこ・元タイ大使、NPO岡崎研究所長、本會評議員)

行

會長就任の挨拶

小田村 四郎

此の度、會員の皆様の御推舉により、國語問題協議會の會長に就任致しました。傳統ある本會の使命遂行といふ重責を汚すことなきやう務めて参りたいと存じてをります。

前任の宇野精一先生には、平成五年、木内前會長御逝去の後を受けて、昨年まで、御老體にも拘らず本會の活動運營に挺身して下さいました。しかし、御老齡の故を以て昨年辭任され名譽會長に御就任頂きました。その後任は當然石井勲先生に御就任頂く筈でしたが、残念乍ら一昨年十一月に御逝去になり、村尾次郎、林巨樹兩先生も御體調が勝れず、と言つて會長職をいつまでも空席にしておくことも許されませんので、淺學非才を顧みず私がお引受けすることとなりました。

申すまでもなく、本會は昭和三十四年に設立され、敗戦後占領軍の絶對權力による言論彈壓下に強行された國語破壊政策是正のために活動して参りました。國語表記が「漢字假名交り文」を本則とすることを認めさせ、民族愚民化

の根源であつた「当用漢字」を廢止(但し代りに「常用漢字」が制定)させたのは、本會活動の顯著な成果であります。

しかしながら、國語の現狀は依然として深刻な危機にあります。当用漢字による國民への強制は廢止されたとは言へ、「常用漢字」は依然官公廳を束縛し、マスコミ各紙もこれに習ひ、混ぜ書き、略字・誤字や原義を歪めてしまふ言ひ換へなどの多用が跡を絶たず、假名遣ひに至つては戦後改惡された「現代仮名づかい」が常態化してしまつてゐます。その他、片假名語の濫用や文語體の減少など、國語の混亂は眼に餘るものがあります。従つて、事態は、まだ正統表記に慣れ親しんだ國民が大半を占めてゐた本會結成當時よりも惡化、深刻化してゐると斷じても誤りではないでせう。

國語は國民文化の基本であります。幸ひ、安倍新内閣は歴史、傳統を重視する「美しい國」創造を謳つてをります。さうであれば、何よりも正統國語の復活が急がれるべきであり、本會の使命も益々重大化したと考へなければなりません。私も非才を顧みず本會の使命達成のために徹力を傾けたいと存じてをりますので、會員の皆様の一層の御支援と御協力を賜りたいと存じます。

言葉の雑學 (七)

鹽原經史

ろ」のそれも轉用で「くらゐ」と書く。

「くづ」例へば、石なら石の全體性から貴石などを取り出すために石をクダク(碎) ことによつて屑は生じる。碎かれた屑を廢棄したならかな山に何かの力が働き山の形狀が亂れるのがクツれる(崩)。これらのクダ、クツと同根だから、假名遣ひはクツになる。

「くひ」土の中に打ち込む棒、つまり杭の歴史的假名遣ひは「くひ」。杭打ちは「くひうち」、棒杭は「棒くひ」になる。『字訓』に「『くぎ』と同根の語であらう」とある。頭を打つてめり込ませる動作を要する物なので、言はれてみると、なるほどどうなづける。

「くらゐ」位はクラ(座) 十(居) からなる。クラは「神を迎えるところをいう。高い柱の上に板をおいて、神を迎える座とした」(『字訓』)。そのクラに居るのが「位」だ。故に歴史的假名遣ひでは「ゐ」。「それくらゐ我慢し

「くれなづむ」暮れようとして暮れない。意だから、つるべ落として日の入る秋の夕景には使へない。ナヅムの「停滯」の意は、「泥む」と書くやうに、水中によどんで進むに足腰を取られるところからか。泥はドロ、ヒヂともいふ。ナヅムのヅもダ行。關連がありや？

「くろづくめ」現代假名遣ひがスクメを本則とするツクメは盡くに、控へめ・高めなど「ほどあひ」の意の接尾語メが付いた語形で、元に歸つて意味を考へると「黒を盡くしたほどあひ」だから、つまり「黒だらけ、黒ばかり」の意になる。歴史的假名遣ひは黒ツクメ。

「くわゐ」慈姑と書くオモダカ科の水生多年草。地下莖は食用に供し、煮物や茶碗蒸しの材料になる。この假名遣ひがなぜ「くわゐ」なのか難しい。平凡社の『世界大百科事典』に「和名はへ食いうるイ(菰)」といふとある。菰ならなるほど「ゐ」に違ひない。

「くんづほぐれつ」「ぐつゝつ」の形で動作の竝立を表す文語の完了の助動詞「つ」の用法の一つで、「さしつさされつ」や「ためつすがめつ」などと同形。「組みつほぐれつ」の前の部分が撥(はつ)音便になつた際に濁音化したのだからクンツでなくてはならない。現代假名遣ひのクンズホグレッツは論外だ。

「けづる」木などを削るのと、髪を解く意の梳(くしけづ)るのと、二通りのケヅルがあるが、ケはキ(木)の母音交代で、上代特殊假名遣ひでは毛と同じ乙類の音とされる。『倭訓栞』に「毛出(いづ)る義にや」とある。歴史的假名遣ひはケヅル、クシケヅルとツに濁音。

「ございます」かつて「御座居ます」と當てて書いたこともあつて、「ござぬます」と書き誤られることがあるが、歴史的假名遣ひでも「い」が正解だ。「御座ある」の縮まつた「御座る」に丁寧の助動詞「ます」が付いた「ござります」から變化した語形だからである。

「ことわざ」古來言ひならはされてきた教訓などに富んだ言葉で「諺」といふ字を用ゐるため、幾分見えにくくなつてゐるが、コトは言、ワザは業で、やはり歴史的假名遣ひは「ことわざ」。動詞の「断る」は「事割る」、コトワリ(理)はその名詞形で、こちらも「わ」。

「こひ」今日では戀を活用させるには「戀する」のやうにサ變になるが、戀は文語では「戀ふ」といふ上二段活用動詞だつた。「戀ひ焦がれる・戀ひ慕ふ」のやうな複合語はその名残。「戀ふ」由來の言葉の「こひ(戀)・こひしい・こひびと」なども「ひ」を用ゐる。

「さいなむ」責め、苦しみ、惱む意。今日では「良心の痛みにさいなまれる」のやうに受け身に用ゐられることが多い。「さきなむ」のイ音便で、『大言海』は「迫否(セキイナ)むノ約轉ニモアルカ」としてゐる。歴史的假名遣ひでも「い」を用ゐて書く語である。

「さいはひ」幸せといふ意味のサイワイは、萬葉に「言靈の幸(さき)はふ國」とある動詞「さきはふ」の名詞形「さきはひ」の音便形なので、サイの部分は正假名遣ひでも「い」。ワイの部分は「にぎはふ」「味はふ」など延(は)ふといふ意の接尾語でハヒと書く。

「さうざうし」「騒々し」と書き、また「騒」の字音もサウなので、サウザウは漢字の字音から來てゐるやうに思はれがちだ。だが、『大言海』に「さうざうハ、騒騒(サワザワ)ノ音便」とある。ウ音便の故に、サウザウの假名遣ひになる。和語のしかも擬音語由來の語。

「さうして」「かうして」と似た音の並び方をしてゐるが、「さう」の部分は音便ではなく、そのやうにの意の文語の副詞「さ(然)」の長音化した語形。「して」の部分はサ變動詞「す」の連用形「し」+接續助詞「て」。「さうしたこと」「さういふやうに」など。

「さうだ」「ひと雨ありさうだ」などと用ゐる状態の助

動詞「さうだ」は、一説に「さま(様)だ」からの變化、もう一説に「様相」といふ意味に用ゐる漢字の「相」に斷定の助動詞「だ」が付いたものとされる。サマの變化でも「相」の字音でも共に正假名は「さう」だ。

「さうだ」「さうだ」といふ助動詞は「ひと雨ありさうだ」などと用ゐる状態助動詞のほかに、「ひと雨あるさうだ」などと用ゐる傳聞の助動詞がある。この「ソウダ」も、歴史的假名遣ひは「さうだ」を用ゐる。丁寧な言ひ方の「そうです」も「さうです」の假名遣ひ。

「さうぢやない」「さうではない」といふ言ひ方が崩れた「さうぢやない」のジャはアハからの變化なので、歴史的假名遣ひはヂヤになる。別れ際に「ぢや、また」などと言ふことがあるが、これも「では、また(お會ひしませう)」の略だから、假名遣ひはやはりヂヤ。

「さかつき」正しい假名遣ひは語の由來を保存する。現代假名遣ひの本則はサカズキだが、酒十坏(つき)から

なる語だからサカツキだ。サカスキでは、酒好き、みた
いだ。語源を断ち切ると、言葉の連綿性が見えなくなり、
國語がやせこけてしまふことに氣づくべきだ。

「さざえ」巻き貝のサザエ（榮螺）の歴史的假名遣ひは
サザエ。古くは、サザイの語形もあつたといふ。『日本
國語大辞典』によれば「ササエ（小家）の義」とする語
源説があるさうな（『日本釋名』など）。その形状からし
てよくできてゐるが、それだとサザへになりさう。

「さしづめ」副詞なので假名で書かれることが多いが、
國語辭書を引けば表記欄に「差し詰め」が掲げられる。
詰めはツメだから連濁なのだ。これをサシズメとせよと
いふ現代假名遣ひは、國語の分裂を強ひるもので、合理
的説明がつかない。國語嫌ひを増やすものである。

「さづける」「授ける」は「捧（ささ）げる」の對語。「神
仏や天皇の意向によつて名称・官位、あるいは學問・伝
書などを、受ける資格のある人に与え、伝える」（『岩波

古語辭典』意。文語形はサツクだが「さハ、下ぐノ語
根、下げ附（つ）くナルベシ」と『大言海』。

「さへづる」今日では、鳥が鳴く、意に用ゐるが、「意味
の分からない言葉をしやべること」（『岩波古語辭典』）。
古代には「さひづる」の語形もあり、「さひづるや」は
「唐（から）」にかかる枕詞（まくらことば）だ。ヅルは
オトツル（訪||音連る）のヅルといふ説も。

「さわぐ」「騒ぐ」は擬音語のさわさわのサワを活用させ
たものであらう。語中語尾のワの音にハを用ゐるのはハ
行轉呼音といつて、昔はワの音ではなく、ハ（もつと古
くはフア、さらに古くはパに近かつたやうだ）の音だつ
た。だから、假名遣ひは「わ」で合點が行く。

縦書きの文法的原理

——國語の論理と構造——

若井 勳夫

學生に對する實驗の結果

縦書きと横書きの文章を書き、讀んだ時にどう違つたかについて平成十四年度から三年間、四回にわたり私の受講生に對して實驗した。その方法は、①同じ題目でまづ縦、次に横で書く、②同じ題目でまづ横、次に縦で書く、③縦と横の同種の文章を讀む、④縦と横の全く同じ文章を讀む、であつた。この結果と分析について本紙上などで發表したが、その題の要點を記すと、縦書きは重み、集中、深み、緊張、内面的な文化力、有機的な縮り、讀みややすさ、自然流、一方、横書きは輕さ、散漫、淺さ、弛緩、表面的な情報性、無機的な崩れ、讀みにくさ、違和感である。對象學生と年度が異なつても、縦と横の受止め方は一貫してゐて、横書きや情報機器、また外國語教育に慣れた現代の若者が意外に縦書きの意義を認識してゐた。

これは流行や大勢に關はらずに言葉や表現の深い根源に

國語として重要なものがあるからではないか。古代から國語を縦に讀み書きしてきた事實はただ傳統といふだけではなく、國語の本質の眞實を表してゐるのではないか。漢字やかなが運筆上、縦書きがふさはしいことは既に言はれてゐる。本稿は我々が言葉を理解し、表現しようとする行為と意識を重點に置いて、國語の内部における論理と構造、廣く文法に關して、縦書きが國語に適ふ根據を考へる。

文末が重い語順

國語は終りまで聞かなければ分らないと言はれる。主語に續いて、どうしたのか、また肯定か否定かといふ結論が中間に目的語や修飾語が入るためなかなか明されない。一方、英語は主語・述語、肯定・否定を先に表し、後に附加的なものを補ふ。泉井久之助氏の言ふ通り、國語は「中途に一つの断裂」があり、「一種の精神的な緊張」が強ひられ、その「解放はひとえに文の最後になつてから」である（『言語の研究』）。國語は初めが輕く、順に重くなり、終りに重要なことが述べられる。この語順は上から下へ重みをつける表現の力の作用であり、これが縦書きの書式に反映する。英語は主述を中核として、前置詞や關係代名詞、また連用修飾の後置など補足が後に續く。書式として横に

延びて、擴散されていく。従つて、横書きには重量がなく、初めは重い、順に軽く、薄くなる。

國語は文の構造だけでなく、語の成り立ちでも同じことが言へる。阪倉篤義氏は動詞の複合語で例へば「逃れ去る、讀み飽く」は、「上從下主」、つまり上の語が下の語を修飾し、後項に意味の中心があつて、これは語順と同じであるとする（「語構成の研究」）。この下の重さは横書きでは表せない。

また、格助詞「の」について、「京の春」は「春」に、「春の京」は京に力點がある。複合語と同じく、「の」で繋がる下の語が意味の中心である。此の輕重、主従は縦の系列によつて認識できる。時枝文法（後述）で指定の助動詞とする「急の話」「花の都」の「の」も「である」といふ指定の意で下の語を説明するが、横書きではその重さを感じられず、輕重が把みにくくなる。「ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔の上なる一ひらの雲」（佐佐木信綱）の歌は「の」を重ねることにより、天空から地上へ、廣く大きい全體の情景から小さな一點へ視點を移し、集中しようとする。語と語との關係を構成する力が強く、いろいろな語に接する「の」のはたらきは縦書きによつて實質化されてゐる。

文末における陳述

言語主體（話し手）の表現過程、表現意識を重んじ、國語に即した独自の文法體系を樹立した時枝誠記氏は語を客體的概念的な詞と主體的觀念的な辭とに二分し辭（助動詞、助詞など）が詞を包み、統一するとした。「櫻の花が咲く。」は、「の」が「櫻」を、「が」が「櫻の花」をと、順に入り型のやうに包み込み、文末に主體の判斷や感情の態度を表し（陳述）、文が成立する。文末の辭によつて文全體を風呂敷のやうに統合し、包括する。「花が咲くだらう。」は「花が咲くことを「だらう」によつて包み、話し手の推量判斷を表す。「花が咲く。」の場合は「咲く」といふ終止形に語として表されない零記号の陳述がはたらき、「花が咲く」といふ判斷を表す。一方、英語は主語・述語が文の骨格であり、isの繫辭によつて繋がる天秤型の構造である。

このやうに、國語は上から下への流れによつて、下に重みが加はり、文末の辭によつて全體をまとめ、主體の言語態度を表して、文を締め括る。この構造がそのまま縦書きに形として表されてゐる。

この言語過程説に基づく文法理論（時枝文法）を批判的に攝取して、構文的職能を中心に文法を體系づけた渡邊實氏は「花が咲く。」はまづ「花が咲く」といふ叙述を統一し、完了させる綜合作用（統叙）がはたらき、次に「花が咲く。」

と断定する主體の精神の作用（陳述）があると説いた（『國語構文論』）。文は文頭で話し手の完結への志向があり、線條的に叙述の世界を述べ、述語による統叙を経て、文末で文を有機的な統一體にならしめる陳述がはたらく。つまり、叙述、統叙の下に、土臺として陳述が根底を支へるやうに、立體的な構造となつてゐる。この構文論的な説明はそのまま國語縱書き論の適切さを證明する。横書きでは陳述の土臺は崩れ、叙述の重みを支へるものがなくなる。横書きの英語は立體とはならず、左から右へ延びる平面的な動きであり、主述を先に明らかにして、これがもととなり、順に附隨的な語を追加する。國語にとつては本來的に不自然な書き方である。

文末決定性

國語は文末に言語主體の判断、立場、氣持を表し、文として統括し、收束する。それは用言の基本形（終止形）、助動詞、助詞によつてなされる。この文構造、表現構造は上から下へ、小さな流れが次第に大きな流れに合し、終りに本流となつて統一される實質が縦書きとして保證されてきた。この文末は述語、述部であり、ここが重要なのである。國語では主語を表さないことが多い。これは主語の省略で

はなく、述語が主語を含んでゐると考へられる。その點英語は主語がなければ文が成り立たず、主語は述語と對置される。國語は主語を示しても、その結果は先送りされ、緊張は終りまで持續され、文末で解決する。文末決定性といはれる所以である。平安時代の女房文學の文章は延々と文が續き、主語が途中で變ることもある。この長文は述語を重ねてゐるのである。これが不自然でないのは、間に統叙を繰り返し、小さな區切りをつけながら、さらに中止形（連用形）や接續助詞で續けていくからである。古く句讀點が発達しなかつたのも文の終りが把みやすいことによる。逆に英語は、附加的なものの終りは句點で明示しなければならぬ。

場所の論理と述語性

高山岩男氏は『西田哲学』で「場所の論理」を次のやうに解説する。主語（特殊）が述語（一般）に於てあることに包攝判断の根本義があり、知ることが成立する。特殊的主語は知られるものであり、物や客観である。一般的主語は知る場所であり、心や主観である。主語は述語の場所に於てあるものであり、述語は主語の於てある（存在する）場所、主語を包む場所、絶対の無の場所である。この主語

と述語は時枝文法の詞と辭に類推解釋できる。

中村雄二郎氏は「場所―無の論理」を此の詞辭論と關はらせて『西田幾多郎』で次のやうに説明する。西田哲學では意識の範疇は述語性にあり、我々は主語的統一でなく、述語的統一にあり、一つの點でなく、一つの圓を成す。そこは物でなく、場所である。これを詞と辭に結びつけると、述語は主語を包み、自己限定し、自己において自己を映す場所である。主語面は述語面に包まれてはたらし、述語面に落ち込んでいく。我の統一は述語的な統一によつてなされ、述語的世界が生み出される。

この述語的世界は渡邊説の叙述から統叙へ、そして陳述で統一、完結する文の成立に即應する。この論理構造が縦書きに反映してゐる。國語を横書きにすれば主語的世界を述語的世界が包み込めず、あらゆる方向に散漫に放射され、深められず、場所が確立しない。従つて「有を生み出す豊かな世界」を形成することができない。

文末（陳述）に及ぶ係結び

係助詞が文末で特別な活用形をとるといふことには深い意味がある。それは係助詞の疑問や強意の主観的な感情が文末にまで及んで、それに呼應して連體形（體言）已然形

（言ひ放し）で終へるといふことである（阪倉篤義）。主體の心に溜められた力、氣息が強く持續され、文末の陳述にまで係つていく。この係結びの構造は縦書きの上から下への押さへの作用に相應する。縦によつて下の基盤が氣合を受け止められる。係助詞「は」も同じはたらきで、主語ではなく、主題を提示し、何について述べるかを明かし、解釋、解説する。これは縦の一本の筋によつてなされ得る。冒頭文「吾輩は猫である」の「は」は一文を越え、次に續く數文まで強く支配する。附記すると、「決して」の陳述副詞、「珍しく遅刻した」「幸ひに合格した」の批評注釋の誘導機能（渡邊實）も文末にまで呼應するはたらきである。

このやうに、縦書きは國語の特性と本質、日本人の表現法に基づいた書き方であつたのである。

（「日本の教育」第五四一號より）

（わかぬいさを・京都産業大學教授、本會理事）

聖書に於る國語問題（その五）

—嗜み、嗜む、嗜まず—

松岡 隆範

今回は軽い問題に就て軽く述べることにする。

新約聖書、提摩太前書第三章の一節から四節に、教會の監督たるべき人の徳義上の資格が示されてゐる。その三節に、

「酒を嗜まず人を撃ず、」

とあり、「嗜まず」にハッキリ「タシ」と假名が振つてある。テモテ前後書に續く提多書第一章にも同様の文言が有り、此處でも「酒を嗜まず」と假名が振つてある。此れは明治元譯でさうなつてをり、大正改譯でも同じである。

舊約聖書の箴言第二十三章二節にも、

「汝もし食を嗜む者ならば汝の喉に刀をあてよ」とあり、同じく二十節に、

「酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ」とあり、此れは假名書である。更に二十一節に、

「酒にふける者と肉を嗜む者とは貧しくなり、睡眠を

貪る者は敝れたる衣をきるにいたらん」

とある。聖書中ではすべて「嗜み、嗜む、嗜まず」であつて「嗜なむ」の用法は探つてゐない。

そこで先づハボンの「和英語林集成」（初版）を調べてみる。TASHIMI -mu, -nda, タシム、嗜む to be fond of, like, have pleasure in. Sake wo - to be fond of sake. となつてをり「酒を嗜む」を用例として示してゐる。そして同義語として「スク」「コノム」が示してある。

續いてTASHINAMIの見出しを二つ擧げて、「タシナム、タシナミ」とし、漢字は「謹」を當て、意味もto be cautious, careful, prudent, provident. であつて「嗜」の字義とは異なる。「身を謹む」の用例を示し to conduct one's self with propriety. の意だとある。

つまりハボンは「嗜」の字にはすべて「タシミ、タシム、タシマズ」の形を使ふのである。

此處で「大言海」に當つてみた。先づ二つの「たしなみ」の見出しで「窘(クルシムコト)」と「嗜」の二語があり、「嗜」の方にはコノミ、嗜好、の他にココロガケ、覺悟、用意、(武士のたしなみ、女のたしなみ)等があり、更に裝飾、(身のたしなみの良き人)とある。

更に四つの「たしなむ」の見出しがあつて、(一)クルシム、

(二)「行儀の正しからむやうにス、(三)「嗜」タシム、好む、(四)「箸」苦シムル、とある。更に「たしむ」の見出しで「嗜」タシムコト、コノミ、嗜好、「たしむ」の見出しでタシナム、コノム、とある。「たしむ」「タシナム」の二つの用例は共に古いらしい。

小學館の「國語大辭典」でも「たしなみ」の見出し二つ、「たしなむ」の見出し二つ、「たしなめる」の見出し一つ、「たしむ」の見出し一つ、「たしむ」の見出し一つがあり、「たしむ」「たしむ」は共に「嗜」でコノムの意だけである。

ヘボンの「和英語林集成」で「謹」を宛てて「タシナム、タシナミ」としてゐるのは、大言海の見出し二番目の「行儀の正しからむやうにス」に當るのであらう。

「箸み」(クルシミ) (クルシメル)の方は「足し無し」から來てゐる如く色々な辭書がほのめかしてゐるが、それが更に「さういふ事をしてはいけませんよ」とタシナメル忠告の意味に迄發展するのは私には判りにくい。「足し無し」だとコノムの意の「嗜む」にはつながりにくい様に思ふ。三遊亭圓生の落語「一人酒盛」に「たしねえ酒だ」といふ言葉が出てくる。上等の酒を五合もらつたので大事な貴重な酒だと言つてゐるので、此の場合はたしかに「足し無き」酒であらう。

松岡靜雄の新編「日本古語辭典」(昭和十二年)では「タシシ、タシナミ、タシナメ」を一括して見出しにかゝげ、タシナシが不足窮乏を意味し、タシナミは苦勞の意から自制の義に轉じ、更に趣味の謂となつた。今嗜好をタシナムといふのはその再轉である。

常に森鷗外に言葉の範を求めようとしがちな私は、鷗外の「澀江抽齋」に當つてみた。第一ペエジから只管、語を辿つてみると、「澀江抽齋」には「嗜む」が意外に多く使はれてゐた。

「のだ平の蒲鉾を嗜んで」(その四十)

「父兄と嗜を異にして、煙草を喫んだ」(その四十七)

「魚類では方頭魚の味噌漬を嗜んだ。」(その六十二)

「鰻を嗜んだ抽齋は、」(その六十三)

勿論「嗜む」ばかりではなく、

「菜蔬は最も菜菔を好んだ」(その六十二)

「鰻も喜んで食べた。」(その六十二)

とも書くのである。

そして只二ヶ處だけ「嗜」にタシナミの訓みを與へてゐ

る。即ち、

「手跡、和歌、音曲の嗜を驗されるのである。」(その三十一)

「武藝の嗜のあることを人に知られて、」(その三十二) はじめ何故右の二ヶ處のみ「タシナミ」になつてゐるのか判らなかつたが、私は次の様に考へるに至つた。

「嗜む」は「コノム」、へボンの云ふ to be fond of の意である。

「嗜」はへボンが「謹」の字を宛てた方の意で、身を謹み、身を修める、教養、心得の意である。

鷗外は此の二つの意味により「タシミ」と「タシナミ」とを呼びわけてゐるのである。

即ち「蒲鉾を嗜んで」、「嗜を異にして煙草を喫んだ」、「方頭魚の味噌漬を嗜んだ」、「鰻を嗜んだ抽齋は」となり、「手跡、和歌、音曲の嗜」、「武藝の嗜」となるのである。

此の使ひ分けは既にへボンにあり、聖書では to be fond of の嗜だけが出て來るので「タシミ、タシム、タシマズ」で統一されてゐるのである。

これだけの事が判つた時、へボン、鷗外に従つて私も「コノム」の意の時は「タシミ、タシム、タシマズ」で行かう

と決心した。私としては「身を謹む、教養、心得」の方も「タシミ、タシム、タシマズ」で行きたいのである。さうすれば「さういふ事をしてはいけませんよ」と云ふ「窘」とハッキリ區別出來るではないか。

語の稽古を始めれば夢中になつてしまふものである。謠、仕舞を嗜む事は「コノム」ことであり、又「心得」でもある。「能樂は抽齋の樂み看る所で、少い頃謠曲を學んだこともある。」(その六十四)

私は和歌も謠曲も「タシミ、タシム、タシマズ」でやつてしまひたいのである。「武士のタシミ、女のタシミ」と言つてしまひたいのである。

但し既に「身嗜み」と云ふ言葉がある。此れを私だけが「ミタシニ」と言ふつもりか、と云ふ問題が起きて來る。

私は暫く、又は姑くはへボン、鷗外の使ひわけに従ふこととしようと思ふ。

此處迄來て、私は念の爲と思つて「邦譯、日葡辭書」に當つてみた。日葡辭書は千六百三年に刊行されたもので、秀吉から家康への替り目の時代のものである。

Taxianani, oda 「嗜み、嗜む、嗜んだ」の活用で mino taxiananu 「身を嗜む」の用例を擧げ、自分の身や服裝に心を配るの意とし、又 Gueirôno taxiananu, 「藝能を嗜む」

をも擧げてゐる。又慎重であり用心深いのもありとして「Taxinoda fto,taxinami aru fto」「嗜^{ツクシヤ}うだ人、嗜^{ツクシヤ}みある人、」として慎重な人、禮節をわきまへた人の意だとある。

Taximi,Taximu の形の見出し語は無い。

此れで私は今後は「タシム」「タシナム」はへボン、鷗外の使ひ分けに従ふこととする。

始めに「軽い問題に就て軽く述べたい。」と言つた。然し私は既に「辭^{コトバ}を費^{ヒキ}すこと稍^ヤ多きに至つた。」(澀江抽齋その六十八)。

今回は此處^{トコ}で止める。

(平成十八年十月)

(まつをかたかのり・彫刻家、元造幣局工藝管理官、本會常任理事)

上代特殊假名遣臆見

— 日本語變換ソフトからの考察 —

市川 浩

今日パソコンで日本語の入力を行ふ場合、假名入力であれ、ローマ字入力であれ、原文を假名書きとして打鍵すると、ディスプレイ上に假名の文字列として表示される。これを假名漢字變換システムを通して、所期の漢字假名交り文に變形して確定すれば入力作業が完了する。

さて例として「早く走れない」と「早くは知れない」の二つの文が可能である。「はやくはしれない」といふ文字列の變換を考へて見る。先づ第一に打鍵文字列を「文節」に分割する過程がある。動詞、助動詞の活用語尾、助詞などの直後、または體言など自立語の直前直後などが分割箇所の候補となる。そして先頭から最も長い文字列の文節を選択して行く。この場合は先づ

先頭の一文字「は」は「葉(他に齒など)」の可能性がある(助詞の「は」はあり得ない)

二連字「はや」は「葉(他に齒など)」と助詞「や」に

結び附いた「葉や」或いは「早」が可能

三連字「はやく」は形容詞連用形「早(速)く」或いは「破約」、「端役」が可能

四連字「はやくは」は「早(速)く」、「破約」、「端役」に係助詞「は」が膠著した形が可能

五連字の「はやくはし」には特定の變換候補が見當らない

この結果「はやくは」が最長の文節文字列となり、「早くは」「破約は」、「端役は」が變換候補として表示される。これに續く文字列に就いて同様の手順を行ふと「しれない」が最長文字列であることが確定して「知れない」が變換候補となる。

しかし目的とする漢字假名交り文が「早くは知れない」ではなく「早く走れない」であれば、最初の文節「はやくは」を強制的に「はやく」まで短縮して「早く」とし、後續の文字列は「はしれない」が上述の過程を経てそのまま最長文節となり「走れない」が變換候補となる。

この一聯の過程はコンピュータの内部で起るのであるが、人間の脳内では假名だけの文字列「はやくはしれない」からはむしろ「早く走れない」を先に思ひ浮べる筈で、それはそれまでに「走り」と「早い」とが關聯した漢字假名

交り文を何度も見た經驗、つまり學習の結果であり、コンピュータでも一旦「早く走れない」で確定するとこれが學習され再度同じ文字列を打鍵變換すれば「早く走れない」が第一候補として表示される。

このやうに見て來ると假名だけの文字列に初めて對應するには人間もコンピュータも試行錯誤的にならざるを得ない。これが漢字假名交りの文字列であれば人間は瞬時にその意味を諒解する。それは漢字が文節の切れ目を明示するからである。コンピュータでも例へば小文字の「つ」「や」「ゆ」「よ」は「つ、や、ゆ、よ」などの大文字とは「[t]」「[y]」キーにより別コードを與へられ且つこれらの小文字は「ん」と共に語頭には來ない特性があるのでこれを利用すれば、これらの假名を含む打鍵文字列は目的とする文節變換への接近度が高いと言ふことができる。従つてもし他の假名でも例へば助詞の「は」とそれ以外の「は」とに「[sh]」キーなどの操作で別コード乃至は特定の標識を賦與できれば、一回の變換操作で目的の文節を得る度合は格段に高まる筈である。この考へを一般化したのが、打鍵中に紛れ易いと思はれる文節の切れ目に「[shift+space]」を挿入する方法である。これにより文節の分割が打鍵者の企圖した通りに正確に行はれる。

問題はそれだけではない。假名だけの文字列では同音異義語が多数あつて、コンピューターは文脈から適正な漢字を選ぶ事ができず、学習したとしても、他の文脈で現れた場合には無力である。此の解決法の一つとして字音假名遣の利用が可能であり、現に實用化されてその有効性が確かめられてゐる。

ここで考へが飛躍する。漢字が渡來して日本語の表記が始つたときそれは眞假名と呼ばれる萬葉假名であつた。これ等が「表音文字」であつたことは紛れもない事實であるが、それを讀む當時の人は今日のわれわれやコンピューターが假名だけの文字列を讀むのと同じであつたらう。さすれば、そこには文節の區切を間違なく素早く發見するための何等かの工夫があつたに違ひない。その工夫は漢字假名交り文の成立とともに必要性が無くなり消滅してしまつた可能性もある。實はその工夫こそ上代特殊假名遣ではなかつたかといふ考へが出て來るのである。

甲乙兩類を持つ十三の假名（エキケコソトヌ（正しくはノ）ヒヘミメヨロ）は謂はば小文字の假名、若しくは「shif」キーによつて別コードを賦與された假名を併せ持つものと考へることができる。實際に石塚龍鷹の「假字遣奥山路」に擧げられた漢字群の用法を概観しただけでも例へ

ば「え」を表す「衣」は語頭にしか來ず、また「け」の場合、助動詞「けり」と動詞（助け）や形容詞語幹（清けし）の「け」とではそれぞれ「祢」と「氣」とで使ひ分けが行はれてゐて、「け」が助動詞或いは動詞・形容詞どちらの一部なのか直ちに判別できるのである。このやうな假名の使ひ分けが單に甲乙兩類を持つ假名ばかりでなく、他の假名においても、例へば壹岐の「い」には「壹」が専ら用ゐられるなど國名などにはほぼ一定の漢字が當てられてをり、このことは、「同音の假名の語による書き分け」乃至「語を書く決り」としての「假名遣」の意識がこの時既に萌芽してゐるとも見られる。

更に假名として用ゐられる漢字には、例へば「か」に「甲（かふ）」、「た」に「當（たう）」を用ゐ（但し例外として「と」には「刀（たう）」、「一方よ」、「ろ」には「用（よう）」、「漏（ろう）」を用ゐるなど明らかに字音假名遣と符合してをり、これも同音の漢字識別の工夫とも見られ、假名の普及し始めた平安期に現れる「消息（せうそこ）」、「法師（ほふし）」などの字音假名遣表記へ繋がつたとも考へられる。孰れにしてもこれまで「假名遣」に就いて、これが意識せられたのは鎌倉時代であり、それまでは發聲と假名表記が一致してゐたから、假名遣は問題とならなかつたとされ

てきたが、實は萬葉假名を含めた假名の發生と共に假名遣が發生したのではなからうか。最初は萬葉假名文字列の判讀を容易にする機能を擔ひ、漢字假名交り文の成立とともに、假名部分の書き方、更にそれに止らず漢字部分の假名表記にも一定の法則性が確立しこれが後世契沖の發見するところとなつたと思はれる。平安後期ハ行轉呼の發生により發聲と表記との乖離が始り謂はゆる假名遣意識が萌え、藤原定家の表記固定の方針から今日の歴史的假名遣へと完成に向つたと見ることが出来る。たゞ定家假名遣は契沖の和字正濫鈔の出現まで五百年の長きに亙り行はれたが、體系的な統一性に缺ける憾があり、爲に假名遣が難しいとの觀念が生じたのは假名遣にとり不幸なことであつた。かうした歴史的事實を見るにつけても、石塚龍麿大人が自らの研究を「假字遣奥山路」とし、更に甲乙兩類の假名がそれぞれ當時の別の音韻に對應してゐた事實を證明せられた橋本進吉博士が「上代音韻文字」とせず「上代特殊假名遣」と名附けられたことに深い感銘を覺えるのである。

石塚龍麿並びに橋本進吉兩先達により集大成された上代特殊假名遣に就いて私如き國語學の門外漢が論考すること自體僭越の沙汰であることを十分承知しつゝ、谷田貝事務

局長の御好意により敢て本稿を發表させて頂く次第であります。會員諸先生の御批判を仰ぎたく思つてをります。

(平成十八年二月七日)

(いちはひろし・本會常任理事・尙申申閣代表)

行

萬葉集における自動詞と他動詞

齋藤 恭一

國語の動詞の、自動詞と他動詞とが、古來歴然と分かれてゐることを知らない人が意外と多い。そこで萬葉集から例をとつて、そのあらましを述べてみよう。

- 一、「所」で自動詞を、「令」で他動詞を表す。
- 二、終止形は同形で、四段活用時は自動詞、下二段活用時は他動詞。
- 三、終止形は同形で、下二段活用時は自動詞、四段活用時は他動詞。
- 四、語幹は同形で、終止形の活用語尾が「・る」の時は自動詞、同じく「・す」の時は他動詞。共に四段に活用する。

一、の場合

漢語では、「所」の助字で受身を、「令」で使役を表すから、わが受身の助動詞「ゆ・る」を「所」に、使役の「す・しむ」に「令」を宛てるのは自然である。「ゆ・る」には自發・

可能の義もあり、これらにも「所」を宛てる。如上の例は除くが、「動詞・助動詞」が複合動詞化して、中古には一動詞となる「見ゆ、覺ゆ」の例だけを擧げる。「ゆ」は未然形に付くから「見ゆ」はもと上一段の他動詞「見る」の未然形「見」に「ゆ」が付いたものが、複合動詞化して自動詞となる。「覺ゆ」の場合は、四段の他動詞「思ふ」の未然形「思は」に「ゆ」が付いた「思は・ゆ」が下の母音ウに引つばられて母音交替を起して「思ほゆ」となり、さらに「おほゆ」となる。

一見、受身(自發・可能)と自動詞、使役と他動詞と、その關係は無縁のやうではあるが、廣義には同じ範疇であらう。「ゆ・る」の本義は自發であるから、少なくとも「ゆ・る」に自動詞的傾向のあることは認められよう。使役は他動詞を強調したと考へられる。

さて、ここで注目したいのは、自動詞に「所」を、他動詞に「令」を宛てた例である。

聞きつやと君が問はせる霍公鳥しのに所沾てこゆ鳴き渡る(一九七七)

健男の思ひ亂れて隠せるその妻天地にとほり照るとも所顯めやも(二三五四)

前者では自動詞「沾る」(下二段)の連用形「ぬれ」に「所

沾」を宛ててゐる。(所も令も漢文では返つて讀む字)後者では自動詞「あらはる」(下二段)の未然形「あらはれ」に「所顯」を宛ててゐる。

九卷の七夕の長歌中に「裳不令濕」(一七六四)とあつて、他動詞「ぬらす」(四段活用)の未然形に「令濕」を宛ててゐる。つまり自動詞「ぬる」の表記は「所沾」であり、他動詞「ぬらす」の表記は「令濕」である。

櫻麻の苧生さくまの下草露さくましあれば令明アカシてい行け母は知るとも
(二六八七)

梅の花吾われは不令落チラサセ青丹よし平城ならなる人の來つつ見るがね
(一九〇六)

他動詞「明かす」(四段活用)の連用形「明かし」に「令明」を、他動詞「ちらす」(四段活用)の未然形「ちらさ」に「令落」を宛ててゐる。おもしろいのが大伴坂上郎女の

今もかも大城おほきの山に霍公鳥なきてトヨム鳴令響良武吾無けれども
(一四七四)

の歌で、「とよむ響・動」は自・他共に終止形は「とよむ」、四段の時は自動詞、下二段の時は他動詞だが、「令響」の表記から、鳴り響かせるの意の他動詞である。「らむ」はラ變型を除いて終止形に付く。「とよむらむ」からは自他の區別はつかない。「令響」の表記によつて他動詞なるこ

とがわかる。ほととぎす(萬葉集では「霍公鳥」を宛てる。中古以後は「郭公」を宛てることが多いが、共に擬聲語で、ほととぎすではなく、くわくこうのこと)の鳴き聲からすれば、文藝的には他動詞の方が生彩があらう。

二、の場合

「立つ」、「付(附・著)く」、「浮く」等、例が多い。

あら玉の伎倍きへの林に汝を多弓タケテて行きかつましじ寝いを先
太多タカね(三三五三)

「多弓即ち立て」は下二段の連用形で他動詞、「太多即ち立た」は四段の未然形で自動詞。

三、の場合

「うれば・た歡登うれは・む紐之結解むすぶ而を家如いへのと解而會遊とけてぞあそぶ」(一七五三)前の「解」は「紐の結」を目的語とする他動詞(四段の連用形)、後の「解」は寛ぐの意の自動詞(下二段の連用形)。

四、の場合

「かくる―かくす隠」、「わたる―わたす渡」、「かへる―かへす反・還」等はなほだ多い。

渡守舟早渡世はやワケセ一年に二度かよふ君にあらなくに(二〇

七七)

「渡守」の「わたり」は四段の連用形が名詞に轉じたもの（動詞から名詞を作る際は、その連用形。「渡せ」は四段の命令形。なほ、集中「渡守」^{ワタリモリ}、「渡瀬」^{わたせ}、「渡代」^{わたりで}と自動詞の複合語のみで、「渡し守」などの他動詞の複合語はない。

如上からして、「ーる」は、助動詞の「る」と無關係ではあるまいし、「ーす」も使役の「す」と同根であらう。といふより、漢語を識る以前に、「ーる」は自動詞、「ーす」は他動詞といふ觀念があつたのではないか。とすれば、受身の觀念は自動詞の範疇に入りうるし、使役の觀念も他動詞の範疇に入りうる。

「全體は部分である（共同体とその成員とは融即の關係である）」といふ未開状態を脱して、個我的意識が生じるのは、自己と他との關係からである。他を意識してはじめて己れを識る。とすれば、文明化した民族の言語に、自動詞と他動詞との區別が存在しうることは、けだし當然のことであらう。

注 歌の下の漢數字は國歌大觀番號。

(さいとうきょういち・元埼玉縣立高校國語科教諭)

「我つくさなむ」について

上田 博和

若井敏明『平泉澄』（ミネルヴァ日本評傳選 平成十八年四月・ミネルヴァ書房刊）の副題に「み國のために我つくさなむ」とある。本文によると、これは平泉がロシア革命の直前に詠んだ歌「身も滅び家も廢れよひたすらにみ國のために我つくさなむ」の下の句である。

「つくさ」は動詞「つくす」の未然形であり、これに「なむ」が續くのだから、この「なむ」は所謂「あつらへ」の終助詞で、「てほしい・てもらひたい」といふ意味である。即ち「皇國のために私はつくしてほしい」と言ふのである。しかし、「あつらへ」とは他に對する願望であつて、「私はつくしてほしい」はいかにもをかしい。作者の意圖は「私は盡さう」といふ意志表示であらう。それをいふなら「我つくしてむ」である。この「て」は助動詞「つ」の未然形で強意を、「む」も助動詞で意志を、それぞれ表す。あるいは「我はつくさむ」でもいい。が、「我つくさなむ」は變だ。

インターネットで「つくさなむ」を検索して、乃木希典の明治四十五年二月の歌「國のため力の限りつくさなむ身のゆく末は神のまにまに」に出會つた。これも「力の限りつくす」のは作者自身であるから、「つくさなむ」では意味をなさない。やはり「つくしてむ」であらう、字餘りだが「我つくさむ」でもいい。もしかすると、平泉の「み國のために我つくさなむ」は乃木の「國のため つくさなむ」が念頭にあつたのかもしれない。

ところで、明治天皇には「ほどほどにころをつくす國民のちからぞやがてわが力なる」「國のため身のほどほどに盡さなむ、心のすすむ道を學びて」といふ御製がある。あとの歌の「盡さなむ」は「つくしてほしい」といふ他(臣民)に對する願望であり、文法が正確である。

明治天皇の「盡さなむ」を、乃木が誤解して模倣し、「自分が盡す」意味で「つくさなむ」と詠み、平泉が更に「つくす」の主語を「我」と表現することによつて「我つくさなむ」といふ奇妙な一節が生れたのではないかといふのが、わづかな調査に基く私の現在の推測である。

*

明治書院編輯部編『改訂實用文法正誤法』(昭和四年二月・明治書院刊)の「なむ」についての記述は次の通り。

「なむ」は希望といつても此の語は自己の希望を述べるのではなく他にあつらへてさうしてほしいといふ意味を表す。

(誤) 我歸らなむとすれども止めて放さず。

(正) 我歸らなむとすれども止めて放さず。

(「テシマハウ」の義)(一六三頁)

最近では島内景二が『楽しみながら学ぶ作歌文法 下巻』(平成十四年十一月・短歌研究社刊)で、①「花咲かなむ」②「花咲きなむ」「かなりの歌人でも、①と②を混同した意味不明の歌を作っている」(四五頁)と述べてゐる、その具體例を知りたい。

*

古文の授業で「花咲かなむ」と「花咲きなむ」を比較して形式と内容の話をするのが常である。両者は「か」と「き」とが異つてゐるだけに見えるが、それは文字の上でのこと。語として見たとき「咲か」と「咲き」は形式は異なるが内容はどちらも「咲く」で同じである。「咲か」「咲き」「咲く」といふ變化は活用と呼ばれ、「形式の變化と内容の不變との矛盾」(三浦つとむ)である。二つの「なむ」は形式は同じだが、前者の「なむ」は(上の「咲か」が未然形ゆゑ)終助詞、後者の「なむ」は(上の「咲き」が連用形ゆゑ)

助動詞「な」プラス助動詞「む」で、内容は異なる。形式と内容はこのやうに一致しないといふ話である。なほ、現代語譯は「花咲かなむ」は「花が咲いてほしい」、「花咲きなむ」は「花がきつと咲くだらう」である。

(うへだひろかず・東京都立高等学校教諭、本會評議員)

六

數字の書き方

高崎 一郎

「36戦争」といふ言葉をご存じだろうか。誰も知らない筈である。正しくは「三六戦争」なのだから。

今から十五年前、安倍晋太郎元外相の急逝により、三塚博元蔵相と加藤六月元農水相が派閥内後継者の地位を争った。二人の名前から一字づつ採った、巷間「三六戦争」と呼ばれる政争である。これを算用數字で記したら意味をなさない。ところが今年五月末、某大手新聞のウェブサイト上に、「加藤6月」および「36戦争」と記した記事があるのを、協議會の渡邊理事が見つけた。新聞社に問ひ質したところ、本紙の記事を電子化するにあたっての單なる誤變換との回答があった。同社は六月一日から、固有名詞以外は本紙紙面も含めてすべて算用數字に統一したから、豫行演習上の失態だったのであらう。

ここ數年、新聞紙面の算用數字化が急速に進んでゐる。

一般の書籍でも傾向は同じとみてよい。外來の事物を貪慾に取入れては消化する、上古以來の日本精神の發露であらうか。それとも國語の喪失に一段と拍車がかかるのであらうか。じつは昨年から今年にかけて、有志の集りである「電腦文字研究會」でこの問題を検討し、『數字の書き方(草案)』にまとめたことがある。

數字の書き方の問題とは、すなはち縦書きの問題である。なぜなら我々は決して算用數字そのものを排斥してはゐない。ただ濫用はいけない、特に縦書き文には調和しないと考へる。

考へてみると英數字は融通の利かない文字である。左横方向以外にならべられないから、本棚の背表紙を探すのに苦勞する。何も不便な方に合せる必要もない筈だが、昔から左横書きへの憧れは根強いものがある。特に近年はネットワークの發達に伴ひ、「世界標準」へと靡く傾向が強い。

歐文が左横書きであるやうに、國語は縦書きが正則である。これは理窟ではなく、習慣として當然の事である。その傳統を守りつつ、表現力を高めるため、數字の書き方を

確認するのは吃緊の要であらう。縦書き文の算用數字について、これまで「答申」や「告示」の類は出てゐない。公文書は原則として左横書き算用數字、おまけに句讀點も歐文と同じだから、考へる必要もないといふ事である。

市販の表記辭典には詳しい分析が載つてゐた。特に

『日本語の正しい表記と用語の辭典』講談社

『記者ハンドブック 新聞用字用語集』共同通信社

の二書は用例なども豊富で、委細を盡した感がある。縦書きが「生きてゐる」何よりの證據である。しかし版を重ねるごとに算用數字を許容する説明が増えてをり、樂觀してはならない。

社會にはじつにさまざまな表現がある。それらの當否について簡潔な判断規則を示す事は意外に難しい。『數字の書き方(草案)』は練りあげること三版に及んだが、なほ迷ふところは多い。漢數字優先といつても、人ごとに少しづつ考へ方は異なる。結局かうした規則を考へるのは、これまで無意識に何となくとつてきた行動を觀察し記録するといふ事に他ならない。縦書きと横書きは、單なる横倒しの關係ではない。思考環境もかはれば、表現技術から表記法

に至るまで何もかも變る。正確な現状分析が大切である。

『數字の書き方(草案)』は書き方の統制ではない。我々はかういふ考へ方で、かういふ手順で表現してみますといふ、世界に向けた説明である。今は稚拙な表現かもしれないが、廣く認められればこれも「世界標準」となる。その努力を笑つたり怠つたりしてはいけないし、努力は報われる時代だと思ふ。まづは厳しい御批判を仰ぎたい。

以下に草案の全文と注目點を示す。

- ・「國語は縦書き原則」の一項は最重要である。當然ながら先頭に置きたい。
- ・「〇」を數字として認めるかどうか、少し曖昧な表現となった。しかしすでに排除はできない時代であらう。
- ・「kg」「m」などの表現を考へるため、「單位語」まで言及した。
- ・「二三三人」など概數、位取字の取扱の二つが焦點である。
- ・「株價一萬〇九一四圓九五錢」の例は、他と異なる原理による表現である。
- ・11月28日のやうな組文字に對する取扱は未だ具體的な結

論に至らなかつた。これは單なるデザイン上の問題とも、書寫の方向が異なる大問題ともいへる。

數字の書き方 平成十八年二月十日 草案三版

國語は縦書きが正則であり、通常は位取つきの漢數字を用ゐて數を表す。しかし主として歐文の影響により、左横書きや算用數字が増え、少からぬ混亂が見られる。國語の傳統を守りつつ、表現力を高めるためにも、數字の書き方について確認することは重要である。よつてここに『數字の書き方』として基準をまとめた。この基準は表記やデザインに制限を加へるものではなく、彈力的に扱はれることを期待する。

一、國語は縦書きを原則とするが、止むを得ぬ時は左横書きも可能である。
いはゆる右横書きは、本案では一字一行の縦書きと解釋する。

二、基本となる漢數字は次の十種類である。「零」の代りに「〇」を用ゐる事がある。

「零、一、二、三、四、五、六、七、八、九」

位取字とは次のやうなものである。「廿、卅」は多用しない方がよい。

「十、百、千、萬(万)、億、兆、京、…」

「割、分、厘、毛、…」

誤記を防ぐ目的で次のやうに書く場合がある。但し括弧内は通常使はない。

「壹、貳、參、(肆、伍、陸、漆、捌、玖)、拾、佰、阡」

以上を合せて漢數字と呼ぶ。

算用數字は次の十種類である。

「0、1、2、3、4、5、6、7、8、9」

區切符號とは、左横書き算用數字の三桁ごとに入れる「」記號である。縦書きではこれを「」で代用することがある。

單位語とは、數字の後または前につけて比較の基準とす

る言葉である。

「例」○個、○枚、○本、○キログラム、震度○、

三、縦書き文では、原則として位取字を含む漢數字のみ用ゐ、區切符號は入れない。

外來語の單位語は片假名書きとし、英字の略號はなるべく避ける。

概數を示す「二十三人」などの表現が「二十三」と誤讀される虞れがある場合、やむを得ず「二、三人」としても差し支へない。

同様の條件で、「十二三歳」や「二百三グラム」なども表現の統一をはかるため、同一文中で「十二三歳」や「二、三百グラム」としてよい。

「第三、四半期」など概數でないものは「・」を用ゐる。

次のやうな場合には位取字を使はない。

- ・ 小數點以下の數字。「例」十二・〇二七。
- ・ 序數のうち、習慣によるもの。

「例」地番および部屋番號。

一〇二四番地何某アパート一〇二號室。

郵便番號。〒一〇〇・〇〇一。

電話番號。〇九〇・一二三四・五六七八

各種コード番號。JIS・X・〇二一。

列車番號。のぞみ二〇三號

國道。國道二四六號線。

西曆紀元。平成十二(二〇〇〇)年。

統計表や索引など、桁を揃へる必要性があれば、位取字を省き、また區切符號を用ゐてもよい。

區切符號を四桁ごとに入れる場合は、誤讀に十分留意すべきである。

〔例〕四、〇〇〇〇、〇〇〇〇圓

「萬、億、兆」をあたかも區切符號のやうに使い、他の位取字を略すことがある。この場合、「」や「」を併用してはならない。

〔例〕株價一萬〇九一四圓九五錢。

次のやうな場合には算用數字を用ゐてもよい。

・固有名詞。〔例〕YS11型旅客機。

・語義と結びついたもの。〔例〕4の字固め。

・習慣によるもの。〔例〕A4版。2B鉛筆。

・その他、読みやすさを考慮して用ゐることは妨げない。

四、左横書き文では、原則として算用數字を用ゐ、必要に応じて區切符號を加へる。

ただし訓讀みの言葉はなるべく漢數字を用ゐる。

〔例〕一(一) < 一〇 (十) < 一〇〇 (百) < 一〇〇〇 (千)

漠然とした數を表すとき、習慣により漢數字を用ゐる。

〔例〕一(一) < 一〇 (十) < 一〇〇 (百) < 一〇〇〇 (千) < 一〇〇〇〇 (萬) < 一〇〇〇〇〇 (萬)

數量の概念を離れた言葉などは漢數字を用ゐる。

〔例〕一(一) < 一〇 (十) < 一〇〇 (百) < 一〇〇〇 (千) < 一〇〇〇〇 (萬) < 一〇〇〇〇〇 (萬)

(たかさきいちろう・高崎齒科醫院院長、本會評議員)

近代日本の「ねじれ」解消の可能性

——イ・ヨンスク『国語』という思想』を讀んで

前田 嘉則

率直に言へば、決して讀みやすい本ではなかつた。明治以降の「國語學」「言語學」の流れを、著者「獨特」の視點で概觀したもので、次から次へと説明は移り、網羅的でカタログの域を出てゐないところもある。それでも社會言語學が専門であるだけに、言語政策についての記述は周到で、日本近代の「國語」は、思想として語らなければならぬほど異常なものであつたといふことがよくよく傳はつて來た。

一般に母語と言はれるやうな、母親が使つてゐた言葉を子供が使ふ當り前の言葉ならば、あへて「思想」と言ふ必要はない。それが「思想」として語られなければならないところに、厄介な事情があつた、さういふことである。

この著者が特に取上げるのは、東京帝國大學の博言學講座を擔當し、後に東京大學文學部國語學科初代主任教授に

なる上田萬年、そして、その思想的後繼者の保科孝一である。

上田は、かう書いてゐる。

「言語はこれを話す人民にとりては、恰も其血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を日本國語にたとへていへば、日本語は日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の國體は、この精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種はこの最もつよき最も永く保存せらるべき鎖の爲に散乱せざるなり」（本書一二二頁）。

このやうな「言語有機體」とも言ふべき、まるで國學者が書いたかのやうな論立てをする一方で、かうも書いてゐる。

「上古及中古の言語上の規則が、此明治の大御世の立派な言語の文典を支配しようといふのは、殆ど我等の解しかぬる事であります」（同一三五頁）。

私自身の目から見て、全く自己矛盾としか見えないのに、本人は全くそのことを自覺しない。ここに「思想」があり、それゆゑに國語の歴史は「ねじれ」てゐるのである。その「思想」は、「言語とは、音でありますから、書いた文字は言語ではありませんぬ」（同九八頁）といふものである。こ

の言語思想が、今も昔も私たちを悩ましてゐる。

しかしながら、歐化政策の明治期においては、西洋語に對抗する「國語」として、「現代」の「人民」が「話す音」に基づいた表記を早急に發明しようとしたのは理の當然であつた。

さらに、その理念は、上田の「忠実な弟子ともいえる」(同一五九頁) 保科によつて、かの悪名高き「棒引き假名遣い」として結實する。本誌の讀者なら御存じと思ふが、「一体、禁酒禁煙とゆゝことわ出来るが、節酒節煙わ出来ないとおなじで漢字の節減わどーも六かしい」(一九七頁) の類である。

以上見たやうに、上田⇨保科の言語観は、いつたいに改革派と呼ばれるが、近代國家建設の條件としての國家語の制定に最も敏感だつたのは彼らであり、その意味で體制側であつた。それに對して保守派は、言語政策には専ら無關心であり、鷗外などの改革派批判が示すやうに、個人の習慣や民族の傳統といふ非政治的な主張で對抗することのみであつた。革新派が政策を作り出すことによつて始まつた日本近代の國語政策は、その始めの段階で「ねじれ」を生じてゐたのである。

このやうに、帝國主義段階の時代に近代國家形成が急務

であつた我が國において、國語學といふ學問に背負はされたものは、複雑であつた。私なりに、本書を讀んでまとめると、次のやうになる。

1 統一國家を築き上げるためには標準語を早急に制定しなければならなかつたといふこと。

2 近代化が一〇〇%歐米化であつた時代に言語學の手本が、話し言葉である歐州語において發展したものであつたといふこと。

3 植民地を抱へてその同化政策を進めてゆくには國家語として國語を確立させなければならなかつたといふこと。

これら三つは、いづれも相互に關聯する問題でもあり、假名遣ひの新舊を單純に歴史性の否定肯定といふ色分けだけではとらへられないことを教へてくれる。

端的な例を挙げれば、植民地においてもしも歴史的假名遣ひを國家語として制定すれば、植民地の人人は歴史的假名遣ひを使用することになる。しかしながら、歴史を共有しない人人が「歴史的」假名遣ひを強制されるといふことには、本來保守派の國語學者は反撥しなければならぬはずである。歴史的假名遣ひの理念を純化すれば、植民地においても現地の言葉を使ふべきだといふことになるからで

ある。したがつて言語政策といふ観点からすれば、保守派は歴史的假名遣ひでない假名遣ひを新たに作り出さなければならぬ。さう考へてみると、保守派の重鎮時枝誠記が、京城帝國大學の國語學の主任教授であつたといふことは、きはめて皮肉な出來事なのである。

また、改革派の中心人物であつた保科の著作には、「すべて優秀なる國民の言語が、一般に強大な感化力を有するものであるから、共栄團の盟主たる日本の言語が、当然その資格を具備してゐるので、これに対して圈内の民族に、不満や反対のあるべきはずがない」(二八七頁)といふ文章がある。改革派がきはめて帝國主義的な言語政策を推進したといふこの事實も、事態の複雑さを示してゐよう。

かうした「國語」の「思想」を読み解くことから學ぶものは多い。「正統假名遣ひを保守せよ」といふことを連呼するだけでは、今日の國語問題はきつと解決しまい。なぜならば、そこに「思想」問題があるからである。明治期の言語政策立案者(俗に言ふ「改革派」)が、進んで取り組んだ課題にたいして、私たちもまた何らかの具體案を提出する必要がある。が、今まで不十分であつた。

その問題を體系的に論ずる能力も資格も私にはない。た

だここではその断片を「覺書」にしておく。

1 標準語と方言の問題

2 言語學と國語學との今後のあり方

3 國家語としての歴史的假名遣ひの制定

かうした問題點の解決には、その前提として會員諸子が日常で標準語を歴史的假名遣ひで書くことがある。そして批判的な人がゐれば、その意見に耳を傾けて聞くことが大切である。また、互ひの違ひを自覺して、その溝を明らかにし埋めてゆく努力を惜しまないことである。「話せば分かる」などといふことを言ひたいのではない。正統假名遣ひを強制したり、それ以外を拒否したりすることは、「國語」が思想的に語られてゐる現在、問題を矮小化してゆくだけだらう。現代假名遣ひを使ふことに迷はせるだけで十分である。言葉遣ひに敏感になり、歴史性に氣附かせ、先に見た「ねじれ」を自覺させることが大事だからである。その意味では、高島俊男氏の一聯のエッセイなどを讀ませることは有益である。

私は、昭和三九年に生まれた。松原正氏のやうに、母親が使つてゐる言語なのだから歴史的假名遣ひを使ふのは當然だといふふうには主張することもできないし、長谷川三千子氏のやうに、新假名遣ひを使ふ側がむしろ説明すべき

で、歴史的假名遣ひを使ふ側には説明する義務はないと堂堂と主張することもできない。とは言へ、坪内祐三氏のやうに若者が歴史的假名遣ひを使ふのはコスプレだといふほど不遜でもない。私の年代の多くがさうであるやうに、福田恆存の『私の國語教室』を読んだからであり、漱石の小説を原文で讀みたからである。さらには、阿川弘之氏や丸谷才一氏の小説に親しく接してゐたといふこともある。このことの経緯そのものを話しても人は耳を貸してくれない。

もちろん多くの人にとつては、假名遣ひなどどうでもよい問題である。さういふ人にどう傳へるか、逆説めくがそれを知らせるためには、本書のやうな本を薦めるのも良い(かなり専門的であるが)。

この書が出た當時の書評にかうあつた。

「ときおり、出版されると同時にその分野の古典となる運命をになつてしまふ本というものがあるが、私の判断が狂つていないならば、彼(引用者註、「彼女」の間違ひ)のこの本はまさしくそういう評価を受けてしかるべき本である。〈國語〉について語るとき、近代日本の政治と文化と教育について考えるとき、この本を無視することは不可能である。」(『毎日新聞』平成九年二月十六日附け 富山太

佳夫氏)

果たして、これが書かれてから十年近くが経つが、今でも新刊書店で購入することができる。それほどにある種の國語學徒には評價を受けてゐる。それだけに、これを批判的にせよ讀むことは、「國語」が、「思想」の媒体になつてきた近代の状況を叮嚀に教へてくれる。

確かに本書は、それ自體が「思想」的なもので、「改革派」の都合の良い書き方になつてゐる。時枝誠記の評價にはかなり異論があるし、そもそも人工文字であるハンゲル文字で讀み書きを永年してきた著者に、私たちの國語の歴史性といふものがどこまで正確に認識できるのか、疑問を持たざるをえない。また、言葉の本質は音であるなどと輕信してゐるが、それには全く同意できない。

しかし、繰り返しになるが、私にはかなり收穫があつたのも事實である。それは近代化といふことが持つてゐる宿命を考慮に入れなければ、國語問題の根本的な解決は得られないといふ冷厳な事實を突付けてくれたことである。保守派が、國語改惡(歴史的假名遣ひを排し、現代假名遣ひを通用せしめたこと)への批判から一步前へ出るためには、近代化といふ問題をどう解決してゆくかといふ視點を示さなければなるまい。先に擧げた三つの「覺書」を御覽いた

だきたい。

たとへば、「標準語」といふ問題を考へてみよう。この問題は、近代國家において必ず問はれてくる問題である。私は六年間、九州の宮崎縣に住んでゐたが、そこでは方言（國語學では「俚言」が正確な表現であるが）が少なくなつたとはいへ健在であつた。「假名遣ひなどどうでもよい」といふことは、「かなづかひやらどんげでんいいちやが」と言ふ。これなどは歴史的假名遣ひで書くことはまだ可能であるが、「帚で掃いておけ」は、「帚ではわいぢよけ」である。「掃く」は「はわく」であるが、これを「ははく」と書いたら「はわく」と他の土地の人が讀めるかどうか疑問である。この點では現代假名遣ひには及ばない。もちろん俚言もまた歴史性を持ち、奈良時代まで遡る資料があれば（これは絶望的である）、「歴史的方言假名遣ひ」とでも呼ぶべきものを決定してゆくことが可能であらう。しかしながら、それが出来ない以上、標準語（中央語）における假名遣ひは歴史的假名遣ひを保守しつつも地方においては、現代假名遣ひを取入れた假名遣ひにしてゆかざるをえない。少なくとも、俚言と標準語との問題について、歴史的假名遣ひを主張する私たちはどうすればよいのかを提言する必要がある。

もちろん、今後、俚言は淘汰されてゆくであらう。テレビやインターネットの普及によつて、標準語の力は以前よりもまして強くなり、地方の言葉を壓倒してゐる。いづれも話し言葉が力を持ち始めてゐるといふことである。

話し言葉で書き言葉を表さうとして始つた言文一致運動であつたが、近代化が一渡りした今日、今度は書き言葉によつて話し言葉の變化の速度を抑制するといふ方向で新たな言文一致を摸索する時期に來てゐよう。そこでは、變へられない言葉としての書き言葉には、規範性がさらに求められる。その時に重要な役割を果たすのは、歴史的假名遣ひである。方言語の自由な展開を支へるためにも、中央語の歴史的假名遣ひの保守性が求められてくる。これこそが近代化が新たな段階を迎へた今日、私たちが強く求めるべきことである。

もちろん、妥協してはならないこともある。私たちの日本語は、本來書き言葉である。したがつて、その基本に返らなければならない。その點で、本書の著者も、明治期の上田萬年もその弟子保科孝一も根本的に間違つてゐる。そして、その理論の背景にあるソシユールの「過去を抹殺しないかぎり話手の意識のなかに入ることはできない。歴史の介入は、かれ（言語學者）の判断を狂はすだけである」

などといふ妄言は、今後「國語」を論じる際には封印すべ
きだ。この前提なしに近代化の問題の解決は不可能である。

著者が考へる、國語に與へられて來た三つの役割は、い
づれも書き言葉を中心に考へるのが妥當であり、歐米言語
への憧憬は、きつぱり捨てなければならぬ。

國語國字の正統表記が當り前と思つてゐる會の會報誌
に、批判だけを書くのは簡單である。だが、そこに留まつ
てゐてはなるまい。私たちもまた、近代日本の抱へた適應
異常を越えてゆく「國語の思想」を提出する責任があるか
らだ。言葉は本來學ぶべき手本であるが、近代國家建設の
道具になつてしまつた（それが「國語」の「思想」化とい
ふことである。福田恆存が書いてゐたやうに「人體實驗以
上の暴舉」である）以上、今しばらくは、言葉を救ふ手立
てを講じる必要がある。手前味噌であるが、私が別のこ
ろで書き進めてゐる「言葉の救はれ」とは、さういふ意味
のささやかな試みである。

（まへだよしのり・清風學園高等學校教諭、本會評議員）

契沖と悉曇（その一）

谷田貝 常夫

眞言宗の佛徒に

契沖が國語にかかはる大きな業績を挙げたのは、悉曇シツツン（い
はゆるサンスクリット）學、つまり梵字の勉學からもたら
されたものであることは廣く認められてゐるところです。
契沖は十歳そこで佛門に入りましたが、その宗派が密
教の眞言宗であつたことが、言語研究の上で後の契沖を大
いに益することとなりました。契沖は『和字正濫鈔』と
いふ本を世に出してゐます。これは『萬葉代匠記』の餘響
ともいへる言葉の研究書で、上代から平安中期頃までの文
獻を調べ、この言葉は、この假名遣は正しい、これは濫れ
てゐると具體的に述べたものです。それに對し、當時の和
歌世界で權威とされてゐた定家假名遣の立場からする批判
の書が早速に現はれました。その書に契沖が強く抗辯する
ために書いた『和字正濫通妨抄』といふ書があります。こ
れは上梓されることなく手書きのみが残つた本ですが、そ
の中で契沖は次のやうに言ひます。

他宗の大師は翻譯こと了はりぬれば、たとへは
阿耨多羅三藐三菩提は無常正等正覺の梵語なり
と知りぬれば、梵字知らざれども、大かたこと足
る故に、梵字の學絶えたり、

つまり、密教以外の佛教宗派では、サンスクリット語が翻譯された漢語なり日本語さへわかれば、もはや梵字は無用としたのに反し、眞言宗では、梵字を知らなければ（漢字や假名に翻譯しない、インドの言葉そのままの）陀羅尼（佛の眞實のことば、眞言）を読み誤つてしまふので、必ず學ばなくてはならないとしてゐることの謂です。

淨嚴を師として

人の眞心（末古古呂）を信じ、誠（末古登）を求め續けた契沖は、高野山での悉曇や儀軌の學業も進み、二十四歳の時に阿闍梨（今の大學でいへば教授といつたところでせうか）の位を受け、更に三十七歳の時には、一歳年上の、しかし當時名聲の高かつた淨嚴（通稱は覺彦）を師として、高野山で傳法灌頂を受けます。このイニシエーションの一種ともいへる儀式によつて契沖は眞言宗の正統な後継者として認められたこととなります。この淨嚴といふ人は、小

野妹子將來の法隆寺「貝葉梵本」を摸寫して解説を加へたり、獨學で梵字の解説書『悉曇三密鈔』を著はしたりといへんな碩學の僧で、當時の悉曇學の中心的存在でした。最後には時の將軍綱吉の歸依を受けて江戸に迎へられ、湯島に今も残る大寺、靈雲寺を創設します。

そもそも日本の言語・音韻にかかはる學問は悉曇學を中心としてゐたことは、本居宣長が『漢字三音考』で「凡ソ音韻ヲ學バム者、必悉曇ヲ知ラズバアルベカラズ」と言つてゐることからも推測できます。外國の音の様が皇國の音とは異なるので、「天空ニノミナラズ、ソノ餘ノ國々ノ音ヲモ識リナバ、何レモ其益アルベケレド、余ガ知ラザル所ナレバ、云フコトアタハズ。タマタマ天空ノ音ノコトハ、傳ヘノアルニ依テ、カツガツコレヲシルスノミナリ」と宣長は正直です。その頃にローマ字を知つてゐたら、ローマ字も知ラズバアルベカラズと言つてゐたら違ひありません。音韻を學ぶには表音文字を使ふのが最適だからです。ともかく、悉曇を學ぶことで、漢字、假名以外に文字があることを意識し、一方、文字とその音に敏感になることは、言語比較から來る當然の歸結です。假名だけからでは、一つの聲が母音と子音に分けられることには思ひも及ばないでせ

うし、梵字にはある音引き（棒引き）が漢字には無いことなども氣づかなかつたでせう。

五十音圖と契沖の作字

宣長の擧げに倣つて、カツガツの知識からの解説を加へます。

梵字悉曇には「字母表」といふものがあり、五十音あるいは五十一字の字母で構成される表が傳はつてゐます。その内容は、摩多（母音）十六字、鉢文（子音）三十三字、それに重字（合成字）二字です。日本語の母音、アイウエオの語順はこの摩多から出てきたものとされ、それと鉢文の子音九つとを組合せて五十音圖の基本は既に平安時代に考案されてゐました。梵字が表音文字であつたから、縦横にマトリックスとして配置された、筋の通つた表による表現が可能になつたといへます。

淨嚴はその著『悉曇三密鈔』の中で、片假名のルビをふつた梵字中心の五十音の音圖を提示してゐます。「五十音圖」といふ命名そのものは契沖を嚆矢とするやうですが、契沖は和字正濫鈔において自分なりの五十音圖を掲げました。その際に、淨嚴が使つた梵字を、後に示すやうに新たに工夫した國漢字に置換へました。契沖が新しく字を造つ

たのです。

淨嚴が圖の中の「い」と「ぬ」の位置を正したとされてゐますが、ア行の「お」に關しては江戸初期頃まで通用の「を」を踏襲してをり、契沖が多少の疑問を抱きながらもそれに随つたことは、淨嚴が師であつたが故と考へられなくもありません。迷つてゐたことは和字正濫鈔の卷五で次のやうに書いてゐることからも察せられます。

愛宕（あたこ、おたき）此「あ」と「お」とかよふ様、人に尋ぬへし。「たわゝ」を「とをゝ」といひ、「わなゝく」を「をのゝく」といふ。此「わ」と「を」と通ふ様もおなし、ア×ヲかかくのことくすみちかへにかよへり、犬（いぬ、ぬぬ）、息（いき、おき）、居（をる、ゐる）、是らもたつぬへし。

つまり、兩方とも同じワ行ではなからうかと疑つて、解決を後世に託したと見受けます。

今ここに、淨嚴の音圖と契沖のものを重ね合はせた五十音圖を提示しますが、見なれぬ契沖の作字の機構は次のやうなものです。

漢字の音を知るのに反切または反音といふ方法があります。平安時代後期の天台僧明覺の説明によると、

反音トハ二字相ヒ合シテ一字ノ音ヲ成スナリ。上字ニ於テ初ノ聲ヲ取り、下字ニ於テ終音ヲ取ル。：：上下相ヒ合シテ方ニイチジの音トナル。

たとへば「契」の反切は「詰計切」で、詰の上字の初の聲kと計の下字ieでケイキエといふ音を表します。この圖は、そのやうな反切の考へを取入れると分り易くなります。

契沖はア行に(安以宇江袁。アイウエヲを置き、ア段に(加左太奈波末也良和・カサタナハマヤラヲ)を置くことで五十音圖を作りました。

下字のi音には以の旁である「人」を充て、u音には宇の旁「于」を、e音には江の旁「工」を、o音には遠の旁「袁」を充てたこと、ご覽の通りです。契沖は卷一にその邊の事情を詳しく書いておます。そして、

「摩多ハ緯「ぬき」なり。躰文ハ經「たて」なり。緯經交はりて絹布を生ずるがごとし」

と譬へます。ローマ字を使はずに音韻のマトリックス表示をしてゐるのも梵字學習の成果でせう。子音と母音が結びついた音節文字である假名だけの五十音圖に比べ、音聲に對しよほど鋭敏なことがわかります。

因みに、梵字の躰文はいつも母音アをつけて發音されま

わ	ワ	ら	ラ	や	ヤ	ま	マ	は	ハ	な	ナ	た	タ	さ	サ	か	カ	あ	ア
和		良		也		末		波		奈		太		左		加		安	
va		ra		ya		ma		pa		na		ta		ca		ka		a	
み	井	り	リ	い	イ	み	ミ	ひ	ヒ	に	ニ	ち	チ	し	シ	き	キ	い	イ
契		良		央		夫		契		契		交		契		契		以	
vi		ri		yi		mi		pi		ni		ti		ci		ki		i	
う	ウ	る	ル	ゆ	ユ	む	ム	ふ	フ	ぬ	ヌ	つ	ツ	す	ス	く	ク	う	ウ
犁		學		畢		畢		畢		牽		季		季		學		宇	
vu		ru		yu		mu		pu		nu		tu		cu		ku		u	
ゑ	エ	れ	レ	は	ハ	め	メ	へ	ヘ	ね	ネ	て	テ	せ	セ	け	ケ	は	ハ
契		皇		契		至		契		契		左		至		契		江	
ve		re		ye		me		pe		ne		te		ce		ke		e	
わ	オ	ろ	ロ	よ	ヨ	も	モ	ほ	ホ	の	ノ	と	ト	ろ	ソ	こ	コ	を	ヲ
契		良		契		莫		契		契		契		契		契		遠	
vo		ro		yo		mo		po		no		to		so		ko		o	

す。ㄐ又はㄑはkaと發音されますが、iを示すㄨをつける
と、kaのaがとれてkiとなりませう。駄文の母音をとる記
號は、なので、ㄐはkといふ子音のみを表します。

△この文章は、『和字正濫鈔』（元文四年刊本）の原書畫像
が見られる『和字正濫鈔CD版』（平成十八年二月横濱五
十番館發行）のために書いた解説書によるものです。▽

（やたがひつねを・本協議會事務局長、元普進士學園教頭）



空想的實務主義を排す

——高崎一郎「これからの假名遣戰略を考へる」を讀んで

木村 貴

本誌第百八十六號に掲載された高崎一郎氏の講演録「こ
れからの假名遣戰略を考へる」を讀んだ。當日所用で講演
會に行けなかつたので、他の會員諸氏からのやうな意見
が出されたか存じ上げないが、この場を借りて高崎氏の主
張の問題點を指摘しておきたい。

高崎氏は「實務的な視點」を強調し、實務家を自負して
ゐる。しかし眞の實務家は現實を的確に把握すべきであつ
て、空想に耽るべきではない。

「平成二十何年か、遂に我々長年の念願叶ひ、歴史的假
名遣が公的に復活したと假定いたしますよ」と高崎氏は會
員に語り掛ける。「平成二十何年」は假定の話にしても樂
觀的過ぎると思ふが、それは問ふまい。問題はその後であ
る。「さうすると内閣府あたりからきつと問ひ合せがある
でせう。市町村など地方自治體の正しい書き方の一覽資料
はないか。郵政公社は郵便番號のついた地名の全データを

質問してくるでせうし、N T Tは電話帳の編輯に困惑するでせう。全国の住民票を手直しするため、日本人の姓名を網羅した客観的な修正データが必要です。我々はさういふ想定をしてゐるでせうか。

講演會場に「さういふ想定」をしてゐる會員は誰もゐなかつたと信じたい。餘りにも現實を無視した想定だからである。

第一に、歴史的假名遣ひが公的に復活したとしても、郵便番號簿や電話帳や住民票にまで適用されるとは限らない。「利便性・繼續性に鑑み、例外的に現代假名遣いを残す」と政府や企業が判断する可能性は高い。或いは現代假名遣いよりも表音性を徹底させた表音記號が新たに導入されるかも知れない。語の表記と音の表記の混同が再び起こらぬやうにする爲には「語の表記は歴史的假名遣ひで、音の表記は表音記號で」と役割分擔を明確にする方が賢明だからだ。かつて橋本進吉や時枝誠記も、歴史的假名遣擁護の立場から表音記號の導入を提唱してゐた。表音記號と云つても實際はカタカナだから、普及は速いだらう。協議會はお呼びでない。

第二に、そもそも内閣府や日本郵政やN T Tが「素人集團」である國語問題協議會に假名遣ひの問ひ合せなんぞし

て來る筈が無い。私がもし内閣府の官僚なら、地名も人名も、まづは東京大學文學部に尋ねる。東大で地方の地名がよく分らなければ、地方大學に尋ねる。それでも駄目なら信頼出来る歴史資料館や博物館を紹介して貰ふ。日本郵政もN T Tも右に倣へである。地名や人名の假名遣ひそのものを研究してゐる學者は今でこそ少數かも知れないが、元々素養はあるのだから、歴史的假名遣ひが公的に復活すれば、忽ち我も我もと専門家が輩出するだらう。インターネットに無料の假名遣情報を公開する研究者も増えるだらう。判断に迷ふ假名遣ひも勝手に話し合つて決めて呉れるだらう。いつまで経つても國語問題協議會の出る幕なんぞ無い。

高崎氏はきつと反論するだらう。「だからこそ政府や企業に信頼されるやうに研究を進めておく必要があるのだ」と。實際、高崎氏は講演で、實質的な自著である『平成疑問假名遣』の「對抗馬としてもつとよいまとめを作つてほしい」と會員に呼び掛けてゐる。しかしそれは本當に協議會や會員がやるべき仕事だらうか。

協議會の役員も會員も仕事の合間の貴重な時間を割いて活動してゐる。それでも本来の目標、すなはち歴史的假名遣ひの復権は實現の兆しすら一向に見えない。高崎氏個人

が好奇心の赴く儘に地名人名の假名遣ひを追究するのは自由だが、それを協議會全體の「連帶責任」などと云つて押附けるのは、唯でさへ足りない時間と人材の無駄遣ひを強ひるに等しく、本來業務の妨げですらある。それでは肝腎の歴史的假名遣復權は遠退くばかりではないか。

高崎氏の研究熱心には敬意を拂ふし、地名によつて歴史的假名遣ひの面白さを感じる事も少くない。だがその面白さは何も郵便番號の附いた全ての地名を調べなければ味はへない譯ではない。そこまでやるのは個人的趣味に過ぎない。高崎氏は自らの研究を單なる趣味と片附けられたくないから、實務上必要な知識だと力説する譯だが、その主張は「空想的實務主義」とでも呼ぶべきであらう。既に述べたやうに、もしも歴史的假名遣ひが復權するのなら、地名人名商品名その他諸々の假名遣ひを國語問題協議會が自ら研究する實務的意義は存在しないからである。

勿論、個々の會員が個人的關心から地名人名その他の假名遣ひを研究するのは自由である。だが貴重な時間を費やしてやるべき事は他に幾らでもある。個人的には、インターネットで所謂ホームページを開設し、ペットの紹介でも旅行の記録でも何でも良いから、歴史的假名遣ひの文章を

書く事を勧めたい。今は技術的に簡單だし、費用も安い。歴史的假名遣ひを實際に使ふ人間が一人増えれば、復權に一步近づく。これぞ地道な「實務」ではないだらうか。

(きむらたかし・新聞社勤務・本會評議員)

第一回 國語かなづかひ講習會 主催 正かなづかひの會

(平成十八年五月十三日 於日本俱樂部)

講習一 八行の活用について

松岡 隆範

こくごかなづかひ じおんかなづかひ
國語假名遣と字音假名遣

わたくし

私が「私は歴史的假名遣を使つてゐます。」と言ふと「あ

あ、テフテフですね。」と言ふ人がゐます。蝶蝶といふ漢

れきしてまかなづかひ

字のことです。歴史的假名遣と聞いてすぐ「テフテフです

ね」と言ふ人は實に多いのです。かういふ人は假名遣の問

じつ おほ

題について殆んど何も知らない人なのです。

れきしてまかなづかひ こくごかなづかひ
歴史的假名遣といふ言葉は國語假名遣と字音假名遣と

じおんかなづかひ

の二つを含んでゐます。

國語假名遣とは和語、やまとことばを假名で書きあらはす時の決り、約束です。和語とは漢語に對する本來の日本語といふ意味です。國語假名遣は國語學者たちの深い歴史的研究に基づいて成立したものです。單に「かなづかひ」

と言へば普通この國語假名遣のことを言ふのです。

とです。 字音假名遣とは、漢字の字音における同音の書分けのことです。 例へば「チヨウ」と讀まれる漢字については

腸 長 はチヤウ

重 徴 はチヨウ

調 彫 はテウ

蝶 貼 はテフ

の様に書分けてゐます。

これらは中國の古い辭書『韻鏡』に基づいて漢字の音を

假名で書く時の約束です。即ち中國の古い漢字の發音を

今日まで傳へる假名遣ひです。

私共は字音假名遣も尊重しこれを守つてをりますが、私共「正かなづかひの會」は國語假名遣についてお話申し上げる事を目的としてをりますので、字音假名遣についてはこれ以上の説明は申上げません。

さて、ここまでで「言ふ」が七回も出て來ました。「言ふ」はこれほどよく使はれる言葉です。

本題に入つて「言ふ」といふ言葉についてお話し申し上げませう。

言ふ 八行四段活用の動詞

言ふは、言はない 言ひて (或は言ひ出す) 言ふ 言ふこと 言へば 言へ、とは、ひ、ふ、ふ、へ、へ、と八行の中で四段に活用します。

私はここで未然形とか連體形とかいふ文法用語は使はな^{たい}いで御説明申上げたい。

ただ、言ふは八行の中でハヒフへの四段に變化するのだと云ふ事だけ覚えていただきたいのです。それだけ覚えれば十分です。

八行四段活用の動詞は他にも

思ふ

想ふ

逢ふ

合ふ

伺ふ

吸ふ

請ふ

追ふ

舞ふ

添ふ

給ふ

問ふ

願ふ

這ふ

祝ふ 等々非常に數多くあります。

かうして八行四段活用の動詞を並べてみるとある事に氣付くでせう。

いづれも人間の情、感情、精神、魂、の大きな動きに關する言葉ばかりではありませんか。

つまり八行四段活用の動詞といふのは日本語の中で、特別の性格を持つた重要な動詞のグループといふ事です。

そしてこれらがすべて八行の中で四段に整然と活用されてゐるのです。

歴史的假名遣がいか^に論理的で整然とした體系を持つて

あるかといふ事がお判りになるでせう。

ですから八行四段活用動詞の變化形を理解し覺える事は歴史的假名遣のほゞ半分をマスターしたといつてもいい位、大きな事なのです。

もう氣が付いてゐる頭のいゝ方もあるでせう。「言ひて」でなくて「言つて」だらう、「思ひて」でなくて「思つて」だらうと。

これは後でオンビシ音便といふ問題が出て來た時に改めて御説明申上げませう。

「現代假名遣い」は何故いけないのか

さて歴史的假名遣とは言語の發音、表記の變遷を歴史的に調べて見出した法則に基づいたものです。各々の「語」を表記する時の約束、きまりであつて、發音そのものを寫さうとするものではありません。

此の整然とした文法體系をぶちこはして、ただ發音に従つて書けとしたのが現在學校教育で行はれてゐる「現代假名遣い」なのです。

文法をぶちこはしてゐますから、正しくは、言はない、言へば、言はう、と書くところを「言わない」「言えば」「言おう」等とワ行とア行と二行にまたがつて五段に變化する

といふでたらめな事になつて文法的には説明がつかなくなつてしまひました。

表音的に考へても私共は決して「言つ」等と重い發音はしてをりませぬ。「言ふ」は「ふ」に近く軽く發音してゐるのです。

「思わない」も私共は決して強く「ワ」(wa)の音を發してはをりませぬ。むしろ「ハ」に近く軽く發音してゐます。歴史的假名遣の方が表音的に考へても眞實に近いのです。

アキハユミ藍川由美といふソプラノ歌手がゐます。この人は日本の歌曲を美しく歌ふことで特に有名です。この人が「日本語の歌曲は歴史的假名遣で歌はなければ日本の歌曲にならない」と云つてゐます。「思ひ出づる」といふ歌詞を「現代假名遣い」通りに「思ひいづる」と歌ふと、イイと強い母音が二つ重なつて平べつたくきこえて、發音にも息にも無理がある。歴史的假名遣で「思ひ出づる」と歌ふと發音も息も樂になつて美しくきこえると云つてをります。

この人の歌ふ日本歌曲を聴くと日本語が實に日本語らしくクツキリと耳に入つてきます。

とにかく「現代假名遣い」にいい處はまるでありません。歴史的假名遣を學んで日本語の正しい姿に立ちかへりませ

う。

(平成十八年五月十三日)

(まつをかたかのり・彫刻家、元造幣局工藝管理官、本會常任理事)

和歌

安東之路翠

熊野本宮大社の獻詠披露式にて詠はれし歌二首

社より廣がり來たる笛太鼓

神も和みてしらべに立てり

元宮の神つ溪川せゝらぎて

明けゆく大地にさやかに響とよむ

御柱祭

和締め巻く男の子等が意氣背に乗せて

波立ち走る諏訪の御柱

惠那山

惠那山をおぼろに映す盃に

どよめき祝ふ齋庭の式事

九十九島成婚祕譚

乙姫を祀る飛鳥霽れゆけば
九州しゅうの男神が沖に見るやも

松岡隆範

雉鳩五首

あまたたび庭ニハにおとづれて雉鳩きつは

小枝集むる巢をつくるらし

雉鳩が小枝くはへて飛去りぬ

巢をつくるらむ雛祭ヒナマツリちかし

いつもより頭アタマをあげて歩むなり

小枝くはへたる庭の雉鳩

小枝くはへ庭あゆみゆく雉鳩の

まろき背中のいつくしきかも

庭を歩む雉鳩を見てわが猫は

身構へたれど襲オソはむとせず

契沖研究會創立十周年記念短歌大會

(平成十八年二月十九日於尼崎園田學園女子大)

稻葉和子

「契沖を讀む」學習に今日もまた

心打つあり身を抓つかむてふ愛

花を生け點茶ちやを契沖に捧げ飲む

憂き日の我れの心癒ゆより

渡邊建

契沖は哀しからずや曾孫に

不朽の業績しごと傳へがたきは

憲法も教育人權なんとせむ

國語棄てたる愚かなる輩ひと

契沖の遺したまひし國語則ことばのり

平成の我いまに廣めん

市川浩

契沖の研ぎ給ひける刃もて

言の葉の道切りぞ開かむ

谷田貝常夫

寒き夜のしじまに幽か傳はるは

契沖が繰る紙音なるか

ぬばたまの墨染にして契沖は

人待つをみなのなざけ付度す

夫李如奈と新字を作る契沖が

ひたむきなる論理和字を救へり

書評

『常に諸子の先頭に在り』陸軍中將栗林忠道と硫黃島戦

留守晴夫著

土屋 道雄

朝日新聞は、昭和二十年二月二十一日に米軍が硫黃島に上陸を開始したことを告げ、一箇月後の三月二十二日に硫黃島遂に敵手に」として守備隊全員の玉碎を報じ、最高指揮官の栗林忠道中將の「小官自ら陣頭に立ち、皇國の必勝と安泰とを祈念しつゝ、全員壯烈なる總攻撃を敢行す：」「たとひ魂魄となるも誓つて皇軍の捲土重來の魁たらんことを期す」との最後の無電と、

國の爲重きつとめ果し得で矢彈盡き果て散るぞ口惜し
仇討たで野邊には朽ちじわれは又七度生れて矛を執らむ
ぞ

といつた辭世の歌を載せてゐる。

栗林中將の「全將兵ニ告グル命令」には「最後ノ一兵トナルモ飽ク迄決死敢闘スベシ：」「予ハ常ニ諸子ノ先頭ニ在リ」とあり、守備隊はその命令に従つて飢餓と渴きに耐へながら敢闘し、栗林中將以下二萬名が散華したが、米軍はそれを上回る死傷者を出した。それは名將・栗林中將が

從來の水際撃滅作戦を採らず、全長十八キロに及ぶ地下陣地を構築し「血の一滴まで戦はなくてはならぬ」といふ強い信念を持つて米軍に徹底抗戦したからである。

この死闘を指揮した栗林中將が長野縣松代町の出身であること知り、同縣人である私は少年の頃から栗林中將を誇りに思ひ、敬愛の念を抱いてきた。それだけに、本年七月に慧文社から留守晴夫氏が『常に諸子の先頭に在り―陸軍中將栗林忠道と硫黃島戦』を出版されたことを何よりも嬉しく思つた。近年これほど讀みごたへのある勞作に接したことはない。

東西の文献を駆使しての論述には教へられるところが多い。米海兵隊のホーランド・スミス中將は「太平洋で戦つたすべての敵の中で、栗林は最も手強い相手」であつたと述べ、栗林中將の戦ひ振りを絶讃してをり、「戦後、アメリカのある雑誌が第二次世界大戦時に於ける世界の名将十人の一人として栗林中將の名を擧げた」とあり、宜なるかなである。

ところが、ほとんどの日本人が栗林中將の名を知らぬか忘れてしまつてゐる。留守氏によれば「地元の書店で松代の歴史と文化を紹介する本を二冊買ひ求めた。いづれもかなり詳細なもので、松代出身の著名人について少からぬ頁

数が割かれてゐるが、『郷土の誇り』だつた筈の栗林中將の名前はどこを探しても見當らない」といふ。口惜しい限りである。

留守氏は「武人として卓越してゐるだけでなく、父親として、夫として、そして何よりも一人の人間として、實に見事で魅力的な栗林中將」の生涯を辿りつつ、示唆に富む日本人論、日本文化論を展開してゐる。例へば「竹槍でも戦争に勝てる」といふ戦前の主張と同じく、「平和憲法」を金科玉條として奉るのも神がかり的であり「現實無視の精神主義である」との指摘、或いは「日本文化は『獨立した自我を有する自由な個人』を尊重する文化ではない」「リアリズムの缺如こそ我々の文化の弱點」であるとの指摘は正鵠を射てゐる。

本書が一人でも多くの日本人に讀まれることを願つて止まない。

最後に、本書が正假名遣・正漢字であることを記し、著者及び出版社に敬意を表する。

(つちやみちを・元本會主事、元横濱創英短期大學教授)

編輯後記

江戸とは不思議な時代で、毎月の月並俳諧に全國から三十萬近くの應募があつたといふ。郵便制度もない頃の話で、人々はこぞつて言葉の遊びに餘念がなかつた。言葉を操る連歌師も鎌倉時代から連綿と續いて明治に至つたが、昭和にも職業とされてゐたのが、今回の講師中山典之圍基六段の父上であつたと伺つて些かならず駭かされた。古き佳き日本だつたといへよう。氏が「いろは歌」は無限に作れると自負されるのも宜なるかなで、全てのかなを自在に遣ふことは、國語理解のよい訓練になるであらう。

岡崎久彦元泰大使が外交に日本語は關係ないと斷言されたことにも別の角度から驚かされた。外交の武器である言葉を操るには日本語を練ることが必須だと思ひこんでゐたからである。氏の稱揚される蹇蹇録を讀むと、陸奥宗光の骨格定つた格調ある文語文と日清戰爭時の外交とは切り放せまいと決めつけてゐたが、宗光は英語にも堪能で、よき翻譯もしてゐたことがわかり岡崎説に納得させられたが、いづれにせよ、國力の消長と國語との關係は密接であることに、あらためて感慨を抱いた。

谷田貝 常夫

〓 正統表記のための実用工具紹介 〓

「國語國字」通巻DVD

本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をDVD一枚に電子畫像掲載。

税込價格 二一、六〇〇圓 書肆 横濱五十番館 (<http://literature.jp/>) 發行

「今昔文字鏡」単漢字15万字版 ver.00 (CD-ROM)

UnicodeのCJKV漢字はもちろん、諸橋大漢和辭典収録の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、現代中國では使われてゐる簡體字まで多種多様な文字を収録。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

税込價格 二九、四〇〇圓 文字鏡研究会編 紀伊國屋書店刊

正統國語ソフト「契沖」 ver. 17.0

歴史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現！
字音假名遣による同音異義語の打分けにも對應。

税込價格 二八、三五〇圓 有限會社申申閣 (<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>)

平成疑問假名遣（平成十七年版）

字音はもちろん動植物・地名人名、さらには企業名や専門用語まで、注意すべき言葉をあまねく網羅。

最新の改訂は <http://homepage3.nifty.com/gimon/> 参照。

税込價格 一、五七五圓 國語問題協議會發行 紀伊國屋書店發賣

關聯電網

- 國語問題協議會 <http://www5b.biglobe.ne.jp/~kokugoky/>
國語問題協議會傳言板 <http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/>
文語の苑 <http://www008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/>
文字鏡研究會 <http://www.mojikyo.org/>
- (有)申申閣(「契沖」) <http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>
横濱五十番館 <http://www.literature.jp/>
平成疑問かなづかひ(高崎一郎) <http://homepage3.nifty.com/gimon/>
日本漢字教育振興協會 <http://www.kanji-kyoiku.com/>
石井式國語教育研究會 <http://www.isisisiki.co.jp/>
ウェブ冊 <http://www.shigarami.net/>
岡田俊之輔の頁 <http://homepage3.nifty.com/okadash/>
高池法律事務所 <http://www.takaike.com/>
現代國語への處方箋(蓮沼利夫) http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/
言葉の救はれー福田恆存論(前田嘉則) <http://logos.blogzine.jp/1/>

平成十九年二月二十三日發行（第百八十七號）
創刊昭和三十五年十二月一日（通卷百八十七號）

編輯・發行

國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六
郵便番號 一四六〇〇八五
電話 〇八〇―三四一―一五〇一
ファックス 〇五〇―三五八八―六七二五
電 郵 0359089356@everynet.jp
URL: <http://www5b.biglobe.ne.jp/~kokugokky/>